滋賀県平和祈念館　第29回企画展示

戦死者8,843名　フィリピンの戦場Ⅰ　ールソン島編ー

（会期：令和3年6月26日～12月19日）

砲弾と兵士たち（フィリピンの戦場にて）

ごあいさつ

昭和16年（1941年）12月8日、日本は米国ハワイの真珠湾と英領マレーの攻撃に踏み切り、当時の日本が大東亜戦争と呼んだアジア・太平洋戦争を始めました。この戦争は日本の壊滅的な敗戦に終わり、日本全体で兵士や軍関係者、民間人を合わせて約300万人が犠牲となりました。日本と東南アジアの資源地帯との間に位置する米国植民地のフィリピンでは、開戦当日から戦争の期間を通して、戦火が収まることはありませんでした。

フィリピンへ送られた日本軍兵士・軍関係者を待ち受けていた現実は、侵攻作戦や制圧地域での米軍やフィリピン人民兵との戦闘、圧倒的な兵力で島々に再上陸してきた米軍からの攻撃、密林での飢餓や感染症でした。この地での日本軍兵士・軍関係者の戦死者はおおよそ518,000人。滋賀県民の戦死者も8,843名に及びます。これは15年間の本県戦死者32,592名の3割近くに達します。最も多くの滋賀県出身者が犠牲となった戦場、それがフィリピンです。

滋賀県平和祈念館では、アジア・太平洋戦争の開戦から80年目にあたる今年と来年（第32回企画展示を予定）の2回に分けて、フィリピンでの戦争をテーマとする企画展示を開催します。今回は、首都マニラが所在するルソン島での戦争を取り上げ、フィリピン全体の戦争経過とともに、関係者の体験談やモノ資料を紹介します。

最後になりましたが、今回の企画展示におきましては、東北大学理学部地理学教室より多大なご協力をたまわりましたこと、深くお礼申し上げます。

令和3年6月26日

滋賀県平和祈念館

第1章　フィリピン

戦死者　1パーセントのプロフィール

8,843 人。この数字は戦争中にフィリピンで亡くなった滋賀県出身の兵士や軍関係者の人数です。県内の小学6年生の男子児童数が 7,057 人（令和2年5月現在）ですので、滋賀県ではフィリピンでの約4年間の戦争だけで、6年生男子児童よりもたくさんの人たちが亡くなったことになります。また、これは戦争による県民死者数のほんの一部なのです。兵士や軍関係者に限っても、中国大陸やビルマ、太平洋の島々、沖縄、そして県内など戦争全体で 32,592 人が亡くなっています。

滋賀県平和祈念館では平成5年（1993年）から、戦死者の情報を含めて、県民の戦争証言を記録する活動（戦争体験の聞き取り調査）や戦争に関係する資料寄贈の受入れを行っており、現在まで約 2,300 名（組織を含む）の方々に提供・ご協力いただいております。こうした調査のなかで、ご家族や親族、親しい友人から提供いただいたフィリピンでの県民戦死者の情報は約100名です。これはこの地での戦死者のわずか約1％に過ぎません。でも、当館に寄せられた彼らの記録・記憶は、亡くなられた方々が厚生労働省の「軍死亡者関係資料」や戦友会の「戦没者名簿」などに記される一人の『兵士』である以前に、かつて滋賀県で暮らしたやさしい息子であり、兄弟想いの兄や弟であり、妻や子どもを愛した一人の『人間』であったことを教えてくれます。家族や郷里を愛した普通の人たちがたくさん、戦争で亡くなられたのです。

当館に寄せられた情報をもとに、そうした1％の人たちのプロフィールをご紹介します。

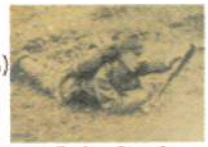
第1節　戦死者が語るフィリピンの戦争経過

草野 文子さん（長浜市）の伯父
草野 唱二さん（24歳）

死亡年月日　昭和17年（1942年）1月3日
死亡場所　ルソン島バンバムガ州ボラック南側

入営後の草野唱二さんから家族のもとへ、農繁期の忙しさを気づかう手紙が送られてきました。

吉坂 ちゑさんの兄
吉坂 英太郎さん（31歳ころ）



死亡年月日　昭和17年（1942年）4月7日
死亡場所　ルソン島サンビセンテ川右岸

吉坂英太郎さんは、雨の日には長靴をもって、妹のちゑさんを迎えに来てくれる、面倒見の良いお兄さんだったそうです。
昭和15年（1940年）、甲南駅から故郷の人たちに見送られて出征されました。

大村 柾一さん（長浜市）の兄
大村 権治良さん（22歳）

死亡年月日　昭和17年（1942年）7月14日
死亡場所　レイテ島タクロバン

大村権治良さんは、昭和15年（1940年）11月に召集されました。

辻 與惣次郎さん（大津市）の弟
（氏名不明）（21歳ころ）

死亡年月日　昭和17年（1942年）12月8日
死亡場所　マスバテ島

水原千代さん（近江八幡市）の夫
水原五郎作さん（26歳）

死亡年月日　昭和17年（1942年）12月25日
死亡場所　ミンダナオ島スリガオ南方20km

水原五郎作さんは農業を営むかたわら、沙沙貴神社の楽師として、祭礼などで横笛や笙を演奏されていました。昭和17年（1942年）2月、水原さんは2度目の召集を受け、妊娠中の千代さんを残して出征されました。水原さんはフィリピンへ送られる直前、生まれて間もない我が子に会うために2時間だけ帰郷されました。それが家族との最後の別れとなりました。

浅田 啓二さん（近江八幡市の兄）
浅田 久満雄さん（24歳ころ）

死亡年月日　昭和17年（1942年）ころ
死亡場所　ミンダナオ島

目片 すてさん（大津市）の夫
目片 嘉一さん（26歳）

死亡年月日 昭和18年(1943年)3月27日
死亡場所 ミンダナオ島ミサミス州マカハンバス

目片 嘉一さんが使用した「九四式陸軍軍事郵便葉書」目片 すてさん 提供

太平洋戦争直前の昭和16年（1941年）11月に結婚された目片さん夫妻の新婚生活は、嘉一さんの召集によって、わずか6ヶ月で終わりました。出征前日、嘉一さんは「自分たちは新婚旅行なしやから、帰ったら行こう。そして、毎日、手紙を寄越す（出す）ように」といって、フィリピンへ出征されました。すてさんが息子の誕生を知らせると、嘉一さんからかわいい革靴やバスタオルが送られてきました。お子さんの生後30日目の写真を受け取って祝杯を挙げた嘉一さんが、次に届いたお子さんの写真を見ることはありませんでした。

寺田 幸吉さん（東近江市）の兄
寺田 松太郎さん（23歳ころ）

死亡年月日 昭和18年(1943年)5月1日
死亡場所 セブ島第14陸軍病院

山上青年学校のころの寺田松太郎さん 右端 寺田幸吉さん 提供

寺田松太郎さんは生まれつき体格が良かったそうです。昭和16年（1941年）1月、地域の青年団長をされていた寺田さんは出征され、その後、部隊移動によりフィリピンへ向かわれました。

井上 あやさん（近江八幡市）の夫
井上 延一さん

死亡年月日 昭和18年(1943年)10月8日
死亡場所 ルソン島北端の沖の海上

蚕の卵を生産する滋賀県蚕種共同施設組合に勤めていた井上延一さんは、長浜工場長代理として単身赴任していた昭和18年（1943年）9月、召集されました。あやさんは、「出征する延一さんの気持ちをくじくから」と、家族にとめられ、夫を見送れなかったそうです。

北野 栄子さん（栗東市）の父
北野 榮一さん

死亡年月日 昭和18年(1943年)10月14日
死亡場所 ルソン島キャビテネ州ダイネ

北野 榮一さん 出征時佐山産業組合にて 北野 すみえさん 提供

昭和17年（1942年）、地元の佐山産業組合で働いていた北野榮一さんは2度目の召集を受け、妻のとくさんとお子さんを残して出征されました。フィリピンの戦地から家族のもとへ、お子さんの写真を待ち焦がれる気持ちを記したハガキが送られてきたそうです。

池田 シカさん（東近江市）の義兄
池田 耕蔵さん

死亡年月日 昭和19年(1944年)4月
死亡場所 ミンダナオ島

古澤 しげさん（日野町）の兄
古澤 久三郎さん（25歳）

死亡年月日 昭和19年(1944年)5月21日
死亡場所 レイテ島

古澤久三郎さんから妻のしげさんへの手紙 古澤 しげさん 提供

西大路郵便局で働いていた古澤久三郎さんは、2度目の召集でフィリピンへ送られました。「出征を秘密にすること」との命令により、誰にも見送ってもらえず、しげさんたち姉妹は家で泣いていたそうです。

植西 弘子さん（大津市）の父
伊藤 武一郎さん（35歳）

死亡年月日 昭和19年(1944年)10月7日
死亡場所 ルソン島マニラ陸軍病院か?

伊藤武一郎さんの水筒 植西 弘子さん 提供

伊藤武一郎さんは、軍属として満州（中国東北部）で働いていた時に結核を発病し、入院されました。昭和19年（1944年）6月、結核が完治していない伊藤さんも召集され、フィリピンへ送られました。「今度、出征したらもう帰れない。」と覚悟していたようで、残される妻子のために資産分与を親族に依頼してから出征されました。

増田 玲子さん（彦根市）の叔父
増田 弘さん（21歳）

死亡年月日 昭和19年(1944年)10月21日
死亡場所 サマール海峡の海上

増田 弘さん 彦根工業学校にて 増田 玲子さん 提供

彦根工業学校を卒業されました。

菅沼 文子さん（大津市）の夫
万木 清良さん（29歳）

死亡年月日 昭和19年(1944年)10月23日
死亡場所 レイテ島タガミ

万木 清良さん 万木 信 さん 提供

すらっと背が高くて軍服姿が似合う万木清良さんは、性格もおおらかで、話し上手な楽しい人だったそうです。
文子さんと結婚され、お子さんにも恵まれましたが、戦争のために新居を留守にすることが多く、家族で一緒に過ごした時間はほんのわずかでした。

古道 由男さん（日野町）の兄
古道 太一さん（23歳ころ）

死亡年月日 昭和19年(1944年)10月23日
死亡場所 レイテ島カドモン付近

古道太一さんは出征の前日、「由男、よう見といてくれよ。私はおそらくもう帰ってきられんと思うで。おまえは何としてもこの家を守ってくれ。この前言うたとおり、絶対守ってくれなあかん」と、弟の由男さんへ家族のことを託して戦地へ向かわれました。

上原 いよさん（高島市）の夫
上原 四郎さん（30歳）

上原四郎さん（左側）と上原いよさん　提供

死亡年月日 昭和19年(1944年)10月25日
死亡場所 レイテ島タガミ

昭和16年（1941年）10月、上原四郎さんは新妻のいよさんを残して出征されました。2人の新婚生活はたった9ヶ月だったそうです。
出征直後に生まれた娘の和子さんが父親に会えたのは、四郎さんが一時帰国を許された昭和18年（1943年）の一度きりでした。

正野 光博さん（日野町）の伯父
正野 次郎さん（22歳）

正野次郎さん（右）と弟の正野光博さん　正野光博さん　提供

死亡年月日 昭和19年(1944年)10月25日
死亡場所 サマール島沖の海上

昭和18年（1943年）、満州鉄道に勤めていた正野次郎さんは「国のために役立ちたい」と志願して、舞鶴海兵団へ入団されました。

池田 シカさん（東近江市）の義弟
池田 甚作さん

死亡年月日 昭和19年(1944年)10月
死亡場所 レイテ島沖の海上

藤田 はるさん（愛荘町）の夫
藤田 駒治郎さん

藤田駒治郎さん　藤田はるさん　提供

死亡年月日 昭和19年(1944年)11月5日
死亡場所 レイテ島

昭和14年（1939年）8月、妻のはるさんと2人のお子さんと暮らしていた藤田駒治郎さんに2度目の召集令状が届きました。「出征を秘密にすること」との命令が出ていたため、駒治郎さんは誰にも送られず、私服姿で家を出ていったそうです。はるさんが戦地の駒治郎さんへお子さんが描いた絵を送ったところ、「月明かりで見た」という返事がフィリピンから送られてきました。それが最後の手紙となりました。

上口 善美さん（長浜市）の伯父
上口 仙太郎さん（33歳ころ）

上口仙太郎さんの肖像画　上口善美さん　提供

死亡年月日 昭和19年(1944年)11月6日
死亡場所 レイテ島タガミ西方陣地

日中戦争で2度も負傷された上口仙太郎さんは、除隊後にとら゛さんと結婚されました。昭和17年（1942年）、再び召集された仙太郎さんは、生後半年のお子さんととら゛さんを残してフィリピンへ出征されました。
出征式に向かう仙太郎さんは、玄関を何度も出入りして踏ん切りがつかない様子だったそうです。

武村 隆さん（栗東市）の兄
武村 司一さん（23歳）

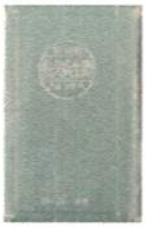
死亡年月日 昭和19年(1944年)11月6日
死亡場所 ミンダナオ島

小学校卒業後、武村司一さんは京都市のお菓子屋さんで働いていました。

山本 紀夫さん（長浜市）の父親
山本 喜一さん

死亡年月日 昭和19年(1944年)11月6日
死亡場所 レイテ島タガミ西方陣地

福島 治郎さん（竜王町）の兄
福島 佐一さん（25歳ころ）


福島佐一さんの「書き込み帳」　福島治郎さん　提供

死亡年月日 昭和19年(1944年)11月14日
死亡場所 レイテ島タガミ周辺

福島佐一さんは小学校卒業後、大阪の小森商店に奉公に出ていました。
昭和16年（1941年）に2度目の召集でフィリピンに送られました。

太田 孝之さん（栗東市）の兄
太田 賢さん

太田賢さんのノート　太田孝之さん　提供

死亡年月日 昭和19年(1944年)11月17日
死亡場所 フィリピンに向かう海上

昭和17年（1942年）、太田賢さんは志願し、甲種幹部候補生として入隊されました。

川瀬 アエさん（東近江市）の夫
川瀬 有蔵さん（30歳）

死亡年月日 昭和19年(1944年)11月21日
死亡場所 ミンダナオ島

役場の戸籍係だった川瀬有蔵さんは生まれたばかりの娘さんを溺愛し、近所に行くときも、いつもおんぶして出かけられたそうです。母親も「女が三人（アエさん・母親・祖母）もいるのに、わざわざ男のあんたがおんぶすることないのに」と、あきれていたそうです。昭和18年（1943年）3月、川瀬さんは「おまえが学校へ行く時分に帰って来ようほん（来るよ）」と、娘さんの頭を撫でてから出征されました。

植田 安正さん（甲賀市）の弟
植田 潔さん（23歳）

死亡年月日 昭和19年(1944年)11月
死亡場所 レイテ島

昭和18年1月、植田潔さんは召集されました。

田中 健治さん（大津市）の弟
田中 修さん

死亡年月日 昭和19年(1944年)11月
死亡場所 ルソン島マニラ沖の海上

田中修さんは技術職を目指していましたが、和歌や短歌、日記を書くことが大好きな文学青年だったそうです。

脇坂 金五郎さん（東近江市）の弟
脇坂 寅夫さん（18歳ころ）

死亡年月日 昭和19年(1944年)12月7日
死亡場所 レイテ島オルモック付近の海洋

脇坂寅夫さんは背が高く、社交的な性格だったそうです。
昭和16年（1941年）、東京の塚本商店で働いていた脇坂さんは体調を崩して帰省した時に役場の勧めもあり、海軍予科練習生に志願されました。土浦の海軍航空隊に入隊後、フィリピンへ送られました。

三上 芳久さん（大津市）の兄
三上 正久さん（21歳）

死亡年月日 昭和19年(1944年)12月7日
死亡場所 レイテ沖の海上

「おいどん」のあだ名で呼ばれた三上正久さんは、いじめられていた下級生を助けるなど、親分肌の度胸が据わった性格だったそうです。発酵化学に興味を持ち、灘の酒屋に就職するため、猛勉強していた三上さんは時流の影響を受け、大刀洗陸軍飛行学校へ入隊されました。

中西 一雄さん（大津市）の兄
中西 恒三さん

死亡年月日 昭和19年(1944年)12月8日
死亡場所 レイテ島ブラウエン飛行場

中西恒三さんは日中戦争で何度も召集されたため、結婚の機会を決めかねていました。
昭和18年（1943年）、中西恒三さんは結婚することもなく、再び召集されてレイテ島に送られました。

滝田 幸七さん（東近江市）の兄
滝田 佳三さん

死亡年月日 昭和19年(1944年)12月8日
死亡場所 レイテ島ブラウエン飛行場

滝田佳三さんは、フィリピンの戦場から「この頃は食べるものがなくて、蛇やトカゲを食べている」と記した手紙を家族へ送られています。

伊吹 達夫さん（長浜市）の弟
伊吹 主己さん（27歳）

死亡年月日 昭和19年(1944年)12月8日
死亡場所 レイテ島

早くに両親を亡くした伊吹兄弟は、達夫さんが親代わりとなって、主己さんを育てたそうです。
主己さんは関西大学2年生の時、学徒出陣で敦賀第19連隊へ入隊されました。

北村 つるさん（大津市）の長男
北村 藤一さん

死亡年月日 昭和19年(1944年)12月8日
死亡場所 レイテ島ブラウエン飛行場付近

北村藤一さんは徴兵検査に合格し、昭和18年（1943年）12月に工兵第16連隊に入隊されました。

門坂 杢平さん（東近江市）の兄
門坂 庄平さん

死亡年月日 昭和19年(1944年)
死亡場所 レイテ島

昭和17年（1942年）夏、門坂庄平さんは家族のもとへ、フィリピンで見たホタルなどの話を記したハガキを送りました。

勝井 吉男さん（甲賀市）の弟
（氏名不明）

死亡年月日 昭和19年(1944年)
死亡場所 レイテ島

安田 一平さんの曾祖父の兄
河原田 貞一さん（高島市出身）

死亡年月日 昭和19年(1944年)
死亡場所 ネグロス島

河原田貞一さんは陸軍航空隊に入隊し、ネグロス島へ送られました。

白井 貞夫さん（近江八幡市）の兄
白井 雄一さん（26歳）

出征前時代の白井雄一さん（右）
白井貞夫さん　提供

死亡年月日　昭和20年（1945年）2月中旬
死亡場所　レイテ島オルモック北東のダナオ湖畔

八幡商業卒業後に、大阪の敷島紡績に勤めていた白井雄一さんは召集され、幹部候補生として豊橋の士官学校へ入学されたそうです。
卒業後、白井雄一さんは第16師団歩兵第9連隊第3大隊第10中隊の中隊長として、フィリピンへ派遣されました。

西堀 誠さん（長浜市）の兄
西堀 恵三さん（22歳ころ）

死亡年月日　昭和20年（1945年）2月26日
死亡場所　ルソン島ラグナ州ロスバニオス

熊本予備士官学校を卒業し、ルソン島の部隊へ配属されました。

市田 勝さん（東近江市）の父親
市田 久治郎さん（33歳）

満州鉄道に勤めていた頃の
市田久治郎さん　昭和12年2月
市田勝さん　提供

死亡年月日　昭和20年（1945年）2月26日
死亡場所　ルソン島マニラ市

昭和18年（1943年）4月、妻と2人の息子と暮らしていた市田久治郎さんのもとに召集令状が届きました。市田さんは舞鶴海兵団に入隊後、ルソン島へ送られました。

長谷井 よねさん（大津市）の弟
長谷井 定次さん（22歳）

死亡年月日　昭和20年（1945年）2月26日
死亡場所　ルソン島マニラ市

長谷井定次さんの寄せ書き日の丸
長谷井よねさん　提供

三菱商事に勤めていた長谷井定次さんは2度目の召集を受け、ルソン島へ送られました。召集時には、すでに結核を発病していたそうです。

植田 美代子さん（東近江市）の兄
植田 建次さん（21歳ころ）

植田建次さん
植田美代子さん　提供

死亡年月日　昭和20年（1945年）2月ころ
死亡場所　ビリ島

植田建次さんは大変まじめな人で、家族の大黒柱として2町歩の田んぼを耕しながら青年学校に通っていました。昭和18年（1943年）、出征が決まると、残された家族が田んぼを耕作できるよう、妹の美代子さんのために子牛を買って来て、牛の扱い方を記した丁寧な説明書きを置いて行かれたそうです。

伊庭 長和さん（高島市）のいとこ
伊庭 信二さん（32歳ころ）

伊庭信二さんの事蹟記事
伊庭長和さん　提供

死亡年月日　昭和20年（1945年）3月1日
死亡場所　レイテ島カンギポット山付近

昭和12年（1937年）10月27日、伊庭信二さんは日中戦争で負傷し、家族のもとへ戦死を知らせる戦死公報の誤報が届きました。当時の新聞記事には「生きていた英霊」としてそのことが取り上げられています。
除隊後、結婚を考えていた昭和16年（1941年）、伊庭信二さんは再び召集され、フィリピンへ向かいました。

田中 もとさん（大津市）の夫
田中 為三郎さん（30歳）

田中もとさん　提供

死亡年月日　昭和20年（1945年）3月21日
死亡場所　ルソン島アンチポロ

田中為三郎さんは、警備隊の隊員として北海道や新潟県で荒地の開墾に従事されていた昭和18年（1943年）に召集されました。妻のもとさんが娘の満里子さんを連れて、伏見の部隊へ面会に行かれた時、軍の敷地を出た2人を見送るため、為三郎さんは塀によじ登って別れを惜しまれたそうです。

吉田 越子さん（近江八幡市）の夫
吉田 喜代次さん（31歳）

吉田喜代次さん
吉田越子さん　提供

死亡年月日　昭和20年（1945年）3月28日
死亡場所　パナイ島イロイロ

昭和19年（1944年）5月、水口警察署で警察官をされていた吉田喜代次さんは、3度目の召集令状を受け取りました。部隊がフィリピンへ出発する日、妻の越子さんは部隊の他の家族と一緒に1時間だけ面会を許されました。それも、「ありがたく思え。親心だ。1時間も面会させてやった」との、部隊長の言葉で終わりを告げたそうです。

田中 昌利さん（野洲市）の兄
田中 実さん（22歳ころ）

死亡年月日　昭和20年（1945年）3月
死亡場所　ルソン島マニラ東方のマリキナ山中

別府市の亀の井バス会社にお勤めだった田中実さんは、呉海軍工廠へ徴用された後、昭和17年（1942年）、薩山航空隊に入隊されました。戦地へ赴く前に、幼稚園に通っていた弟の昌利さんにランドセルを買ってあげたそうです。

竹内 はつ江さん（湖南市）の弟
竹内 春造さん（24歳）

死亡年月日　昭和20年（1945年）4月1日
死亡場所　レイテ島

妻と子どもを残して出征されました。

北川 久雄さん（東近江市）の父親
北川 佐右衛門さん（34歳）

死亡年月日 昭和20年（1945年）4月5日
死亡場所 ルソン島リザール州アンチポロ

五個荘郵便局などで働いていた北川佐右衛門さんは、昭和19年（1944年）5月、海軍の徴用中に召集されました。
家族との最後の別れもできずにフィリピンへ送られた北川さんは、戦地へ向かう列車から、東海道本線沿いに住む親戚にあて、ハンカチを投げ落とし、自分が戦地へ出発したことを家族に知らせました。

永谷 芳昭さん（大津市）の父親
永谷 時治さん（32歳）

[illegible]

死亡年月日 昭和20年（1945年）4月10日
死亡場所 ホロ島バンカル山

永谷時治さんは気が強く、日中戦争の出征でも人前で泣くことがなかったそうです。昭和19年（1944年）の出征では、事前にフィリピンへ派遣されることを知らされていたため、再び会うことができない家族を想ってなのか、靴を履きながら泣かれたそうです。

池田 シカさん（東近江市）の夫
池田 悌治さん（29歳ころ）

[illegible]

死亡年月日 昭和20年（1945年）4月12日
死亡場所 ルソン島リザール州五訓山

昭和17年（1942年）、徴用で大阪の日立造船に働きに出ていた池田悌治さんは、夫婦で住むための新居を郷里に建て、親戚のシカさんと結婚されました。昭和19年（1944年）6月20日、徴用期限が終わったその日、池田さんのもとに召集令状が届きました。池田さんは一度も新居に住むこともなく、シカさんと生まれて間もないお子さんを残して、大阪から出征して行かれました。

竹内 充夫さん（大津市）の兄
竹内 伝さん

死亡年月日 昭和20年（1945年）4月18日
死亡場所 ルソン島ウラニオン州ヤリヤガン

大津商業学校を卒業され、三菱重工にお勤めでした。

西村 操さん（大津市）の夫
西村 雄次郎さん（36歳ころ）

死亡年月日 昭和20年（1945年）4月24日
死亡場所 ルソン島クラーク空軍基地付近か？

西村雄次郎さんは、妻の操さんに「ちょっと行って来るだけや。ちょこちょこっと行って、じき（すぐ）に戻ってくるわ」と、言い残して出征されました。

中島 君香さん（草津市）の夫
中島 久太郎さん（34歳ころ）

死亡年月日 昭和20年（1945年）4月25日
死亡場所 ルソン島

畳屋さんを営まれていた中島久太郎さんは召集され、昭和19年（1944年）4月に舞鶴海兵団に入団しました。
久太郎さんからのハガキには、切手の裏に「おなかが減るので何か送ってほしい」と、妻の君香さんに宛てた秘密の依頼が記されていたそうです。

池田 シカさん（東近江市）の義弟
池田 健吉さん

死亡年月日 昭和20年（1945年）4月
死亡場所 レイテ島

仙波昭男さん（近江八幡市）の兄
仙波彦嗣さん（29歳）

死亡年月日 昭和20年（1945年）5月16日
死亡場所 ミンダナオ島ブキドノン州マルコ

朝鮮の三中井百貨店で働いていた仙波彦嗣さんは、昭和19年（1944年）3月、結婚のために帰郷されました。挙式後、2人で朝鮮のご自宅へ戻ろうとした矢先、召集令状が届きました。仙波さんは花嫁を残して、1人で出征して行かれました。

黄瀬 しげさん（湖南市）の夫
黄瀬 増次さん（33歳）

死亡年月日 昭和20年（1945年）5月20日
死亡場所 ルソン島ヌエバシャ州イロイロ

黄瀬増次さんは農業とともに、牛車曳き・木材運搬で生計を立てられていました。出征で駅へ向かう途中、振り返って故郷の東寺（湖南市東寺地区）をじっと見ていたそうです。

横田 高知さん（大津市）の父親
（氏名不明）

死亡年月日 昭和20年（1945年）5月
死亡場所 ルソン島クラーク地区

奥島 すみ子さん（甲賀市）の兄
奥島 宗男さん（26歳）

[illegible]

死亡年月日 昭和20年（1945年）6月2日
死亡場所 ネグロス島マンダラガン山付近

奥島宗男さんは、校長先生の息子さんと喧嘩して、警察から呼び出しをくらうなどの武勇伝を持つ「やんちゃ者」でしたが、小学校に入学するすみ子さんにランドセルや弁当箱を買ってあげるなど、兄弟想いのやさしい人だったそうです。青年学校に通いながら、佐山村（甲賀市小佐治ほか）の農協に勤めていた昭和15年（1940年）8月に現役で出征され、昭和19年（1944年）に部隊移動によってフィリピンへ送られました。

小森 信行さん（野洲市）の父親
小森 庄四郎さん（27歳）
死亡年月日 昭和20年(1945年)6月8日
死亡場所 ルソン島アンチポロ

川嶋 ことさん（栗東市）の夫
（氏名不明）（37歳ころ）
死亡年月日 昭和20年(1945年)6月8日か?
死亡場所 ルソン島

中井 利郎さん（東近江市）の叔父
中井 三郎兵衛さん（26歳ころ）
死亡年月日 昭和20年(1945年)6月15日
死亡場所 ルソン島マニラ東方のイポ

宇野 八重子さん（草津市）の父親
宇野 弥右衛門さん
死亡年月日 昭和20年(1945年)6月15日
死亡場所 ルソン島

宇野弥右衛門さんは身体が大きく、おとなしく、口数が少ない人だったそうです。出征当時、4歳だった娘の八重子さんは、弥右衛門さんに「お相撲やラムネの瓶にタバコの煙を入れて遊んでもらったことを覚えているが顔が思い出せない」と話されています。

木村 茂さん（近江八幡市）の兄
木村 周一さん（23歳）
死亡年月日 昭和20年(1945年)6月15日
死亡場所 ルソン島マウンテン州ババンガン

昭和17年（1942年）1月、木村周一さんは弟の茂さんに「通信兵は後方部隊やさかい、戦果を上げられる兵士でないけども、精一杯やってくる」と言って、出征されたそうです。

奥野 正一さん（近江八幡市）の兄
奥野 孝三さん（30歳ころ）
死亡年月日 昭和20年(1945年)6月15日
死亡場所 ルソン島イサベラ州ジョネス

水島 登志さん（野洲市）の夫
水島 保さん（40歳ころ）
死亡年月日 昭和20年(1945年)6月15日
死亡場所 ルソン島リザール州マニラ南方

水島保さんは柔道七段の腕前で、鹿児島の第七高等学校（現在の鹿児島大学）の助教授をされていました。

大橋 善治郎さん（多賀町）の兄
大橋 由太郎さん（31歳）
死亡年月日 昭和20年(1945年)6月18日
死亡場所 ルソン島

平井　光子さん（東近江市）の夫
平井 義夫さん（26歳ころ）
死亡年月日 昭和20年(1945年)6月22日
死亡場所 ルソン島ブギヤス

2回目の出征でルソン島へ送られました。

猪田 清治郎さん（東近江市）の弟
猪田 和一さん
死亡年月日 昭和20年(1945年)6月
死亡場所 ルソン島バレテ峠

上村 重良さん（甲賀市）の父親
上村 重郎右衛門さん（47歳）
死亡年月日 昭和20年(1945年)7月2日
死亡場所 ルソン島

上村重郎右衛門さんは貴生川町長などを歴任された後、昭和18年（1943年）に召集され、食糧増産隊中隊長となりました。
戦地では「郷里でも食糧増産のために男手がいるだろう」と、農家出身の部下を帰郷させたそうです。

山田 利治さん（東近江市）の父親
山田 彌五郎さん（31歳）
死亡年月日 昭和20年(1945年)7月8日
死亡場所 ルソン島リザール州バングンバヤン

青木 喜代さん（愛荘町）の夫
青木 勘四郎さん（37歳）
死亡年月日 昭和20年(1945年)7月12日
死亡場所 ミンダナオ島

農業を営まれていた青木勘四郎さんは、4度も兵役に服しました。その合間に喜代さんと結婚しましたが、いっしょに暮らした期間はわずか1年6ヶ月あまりでした。昭和19年（1944年）8月、フィリピンへ出発する前に勘四郎さんは、「死なせんがな、死なせんがな。わしは看護兵やで死なせんがな」と、喜代さんたちに繰り返していたそうです。「衛生兵やから、必ず帰って来る。子どもはそれから作れば良い」言っていた勘四郎さんが再び戻ることはありませんでした。

安藤 克恵さん（草津市）の兄
安藤 清太郎さん（38歳ころ）
死亡年月日 昭和20年(1945年)7月13日
死亡場所 ルソン島

息子さんの誕生を知らずに亡くなられました。

初田 智久さん（大津市）の夫
（氏名不明）（34歳ころ）

死亡年月日 昭和20年（1945年）7月15日
死亡場所 ミンダナオ島

初田智久さんのご主人は、草津の郡農会で働いていました。昭和17年（1942年）1月に召集され、智久さんと2人のお子さんを残して、フィリピンへ送られました。

中川 あい子さん（多賀町）の兄
中川 与一さん（27歳）

死亡年月日 昭和20年（1945年）7月15日
死亡場所 ミンダナオ島コタバト州ミラヤ

昭和17年（1942年）2月、中川与一さんは2度目の召集を受け、母親と妹のあい子さんを残して出征されました。

井上 桂一さん（東近江市）の父親
井上 外次さん（32歳）

死亡年月日 昭和20年（1945年）7月16日
死亡場所 ルソン島カヤバ山中

昭和18年（1943年）12月、井上外次さんは奥さんに遺書を手渡し、「もし、わしが無事に帰ってきたら開ける必要はないから、何かあるまでしまっておいてくれ」と言って、家を出られたそうです。

奥島 すみ子さん（甲賀市）の兄
奥島 一重さん（24歳）

死亡年月日 昭和20年（1945年）7月17日
死亡場所 レイテ島ビリヤバ周辺

奥島一重さんは大阪の薬屋さんに丁稚として奉公に出ていた時に、満洲義勇軍に志願されて中国大陸へ渡られました。その後、召集を受けて所属した満洲の部隊がレイテ島へ派遣されました。

川村 英さん（東近江市）の夫
川村 吉蔵さん（36歳）

死亡年月日 昭和20年（1945年）7月23日
死亡場所 ルソン島

フィリピンへ派遣される前夜、川村吉蔵さんは妻の英さんやお子さんたちを伏見の旅館に呼んで、最後の晩を一緒に過ごされました。「今度は行くところが、行くところやからな」と話されたそうです。部隊の見送りでは、幼い娘さんが「お父さん」とヨチヨチ歩きで後を追う姿を、一度振り向いて見ただけで、そのまま歩いて行かれました。

小辰 くまさん（東近江市）の夫
小辰 源左衛門さん（32歳）

死亡年月日 昭和20年（1945年）8月1日
死亡場所 ルソン島東方60kmの山中

昭和19年5月、年齢的に「もう召集はないだろう」と村の役をいろいろと引き受けていた小辰源左衛門さんに召集令状が届きました。妻のくまさんは出征直後に生まれた息子さんを源左衛門さんに見せるため、一度だけ、舞鶴の部隊に面会に行かれたそうです。それが2人の最後の別れとなりました。

齋藤 茂さん（近江八幡市）の兄
（氏名不明）

死亡年月日 昭和20年（1945年）8月5日
死亡場所 ネグロス島

齋藤茂さんのお兄さんは、滋賀県庁の土木部で働いていましたが、技術を買われて海軍に徴用され、軍属としてネグロス島へ渡りました。

山本 志津さん（野洲市）の夫
山本 弥右衛門さん（36歳）

死亡年月日 昭和20年（1945年）8月8日
死亡場所 ルソン島

山本弥右衛門さんは地域の在郷軍人会の会長を長く務められていたそうです。

久保 とみさん（草津市）の夫
久保 勝さん（33歳）

死亡年月日 昭和20年（1945年）8月15日
死亡場所 ルソン島

家業の家具屋さんを手伝っていた久保勝さんは身体が弱かったため、長い間、召集されませんでした。昭和18年（1943年）9月、戦況悪化により召集されました。

和治 なつさん（高島市）の夫
和治 清さん

死亡年月日 昭和20年（1945年）8月19日
死亡場所 レイテ島

昭和18年（1943年）12月18日、京都に奉公に出ていた和治なつさんは、両親が決めた結婚相手の清さんと式を挙げられました。その5日後、清さんは出征し、2度と帰って来ることはありませんでした。

西堀 誠さん（長浜市）の兄
西堀 郁三さん

死亡年月日 昭和20年（1945年）8月19日
死亡場所 ルソン島

山元 ふゆさん（栗東市）の夫
山元 新六さん（30歳ころ）

死亡年月日 昭和20年(1945年)9月6日か?
死亡場所 ルソン島

山元新六さんは身体が弱かったそうです。戦況悪化により、昭和19年（1944年）2月に召集されました。

松村 晋二郎さん（東近江市）の弟
松村 友三郎さん（19歳）

死亡年月日 昭和20年(1945年)10月3日
死亡場所 ルソン島カンルバン米軍第174衛戍病院

死亡年月日が不明な戦死者

田中太啓男さん（大津市）の兄
田中光男さん

死亡年月日 昭和18年(1943年)4月以降
死亡場所 レイテ島

田中光男さんが戦地で読んでいた句集
「ルバタン山中記」　碑に墨書きを書いたもの。記念碑を建立す
田中太啓男さん　提供

森田 久隆さん（長浜市）の父親
森田 久治郎さん

死亡年月日 昭和19年(1944年)12月以降
死亡場所 ルソン島ワワ付近の第65陸軍病院か?

昭和18年（1943年）2月、森田久治郎さんは幼い娘さんを亡くされました。翌年、久隆さんが生まれて大変喜んだのもつかの間、昭和19年（1944年）6月に召集令状が届き、妻と幼いわが子を残して出征されました。

猪飼 久子さん（栗東市）の兄
（氏名不明）

死亡年月日 昭和20年(1945年)
死亡場所 ルソン島マニラ

荒川 卯太郎さん（日野町）の兄
中澤 由吉さん（27歳ころ）

死亡年月日 不明
死亡場所 ルソン島サラクサク峠

中澤由吉さんの遺骨　昭和19年(1944年)9月
荒川文雄さん　提供

中澤由吉さんは子どものころ、身体が小さく、どちらかというとおとなしい性格だったそうです。
昭和19年（1944年）、地元の酒屋さんで働いていた中澤さんは召集されて、フィリピンへ送られました。

藤本 速雄さん（高島市）のいとこ
藤本 太郎助さん（23歳ころ）

死亡年月日 不明
死亡場所 レイテ島カンギポット山付近

藤本太郎助さんは父親ゆずりの豪傑だったそうです。出征前日の晩も、ほとんど夜通しお酒を飲んでいたため、出征式ではまともに挨拶できないほどの二日酔いでした。
家業の関係で自動車運転免許を持っていたため、海軍陸戦隊の自動車班に配属されました。

丸山 弘さん（大津市）の兄
丸山 幸治さん（18歳）

丸山幸治さんの軍帽　丸山弘さん　提供

死亡年月日 不明
死亡場所 レイテ島

昭和15年（1940年）、丸山幸治さんは志願兵として出征されました。

加藤 與市郎さん（大津市）の弟
加藤 順三さん

死亡年月日 不明
死亡場所 レイテ島

航空兵としてフィリピンへ送られ、音信不通となったそうです。

奥村貞男さん（草津市）の弟
奥村清三郎さん

死亡年月日 不明
死亡場所 レイテ島

海軍に入隊されました。

疋田 きくさん（高島市）の弟
（名前不明）

死亡年月日 不明
死亡場所 レイテ島

徴兵検査に合格し、そのまま入隊されたそうです。

奥内 くにさん（近江八幡市）の息子
奥内 文雄さん

死亡年月日 不明
死亡場所 ミンダナオ島

奥内文雄さんの子どものころの夢はパイロットになることでした。川西航空機で働いていた昭和17年（1942年）1月、奥内さんは志願し、土浦航空隊に入隊されました。

西澤 敬治郎さん（東近江市）の父親

西澤 久三さん

死亡年月日　不明

死亡場所　ミンダナオ島

奥村 早智子さん（大津市）の叔父

（氏名不明）

死亡年月日　不明

死亡場所　ネグロス島

今回新たに情報が寄せられた人たち
（フィリピンでの滋賀県出身戦死者）

澤地 洋子さん（東近江市）のおじ

澤地源一さん

死亡年月日　昭和17年(1942年)2月10日

死亡場所　ルソン島デルピアン第75兵站病院

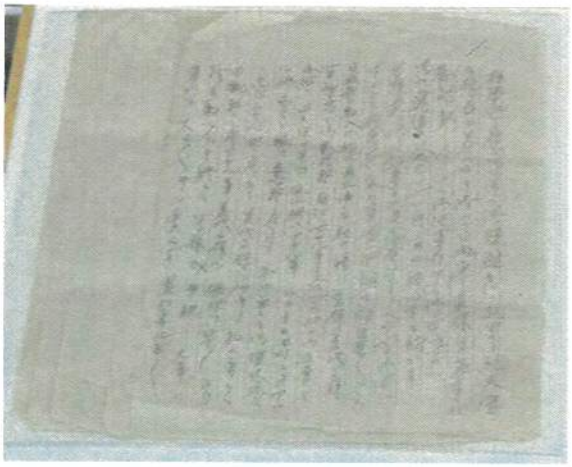
昭和16年（1941年）に召集を受けて、第16師団の工兵第16連隊に配属されました。昭和17年（1942年）2月5日、ルソン島バターン半島のサトマ山北東部での戦闘で負傷し、5日後に運ばれた野戦病院で亡くなられました。

冨田 静さん（大津市）の兄

冨田 太郎さん（29歳ころ）

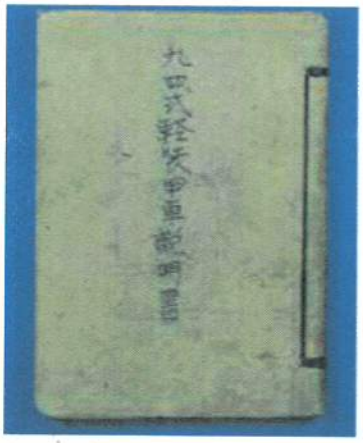
死亡年月日　昭和19年(1944年)10月25日

死亡場所　レイテ島



草野昌二さんからの最後の手紙

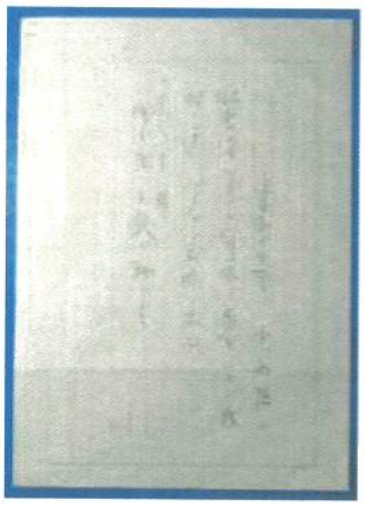
戦地へ向かう途中に父親の文治郎さんへ送った最後の手紙です。



左：目片嘉一さんが使った『九四式軽装甲車説明書』
（発行年・発行所不明）

右：藤田家の門柱に貼られた門標

夫の藤田駒治郎さんが戦死された後に渡された『遺族の家』の門標です。



左：中西恒三さんの遺書　　**右：日の丸小旗**

中西恒三さんは、昭和17年（1942年）3月10日の入隊に際して、「遺言としてはなし。何分あとはよろしく頼みます」と記されました。

小森金之助さんの陸軍戦闘帽

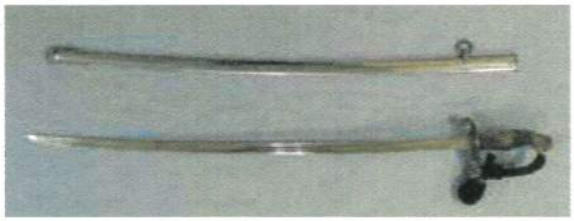
第２節　戦死者の遺品　ありし日を偲ぶモノ

左：上口仙太郎さんの軍服

陸軍の軍装と出征の時に着用した赤たすきです。

右：伊藤武一郎さんの国民服（上衣とズボン）

伊藤武一郎さんが、最初の召集から戻られ、在郷軍人会に所属していた時に着ていた国民服です。



水島保さんの指揮刀

柳行李とともに、水島保さんが軍隊で使用していたものです。

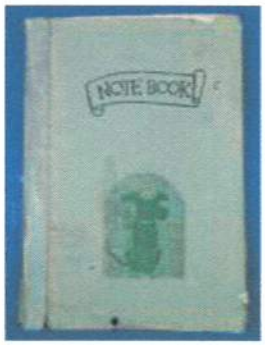
左：中川与一さんの軍服上衣

2等兵の襟章・肩章が縫いつけてある陸軍の軍服です。

右：水島保さんの柳行李

井上外次さんの遺言状・家族へのハガキ

遺言状は、井上外次さんが出征前に「何かあるまでしまっておいてくれ」と、家族へ渡した遺書です。父親や妻ヤエさん、子どもたちに贈る言葉が記されています。



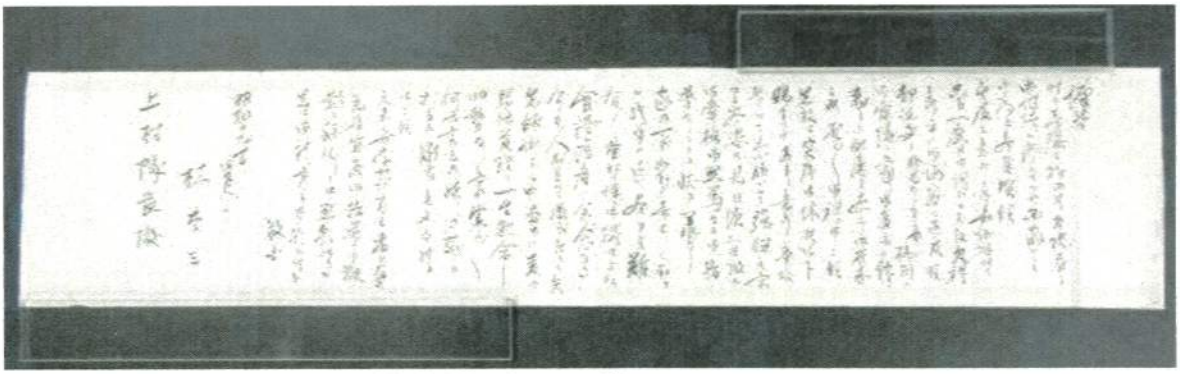
左：太田賢さんのノート

右：北川佐右衛門さんの国民労務手帳

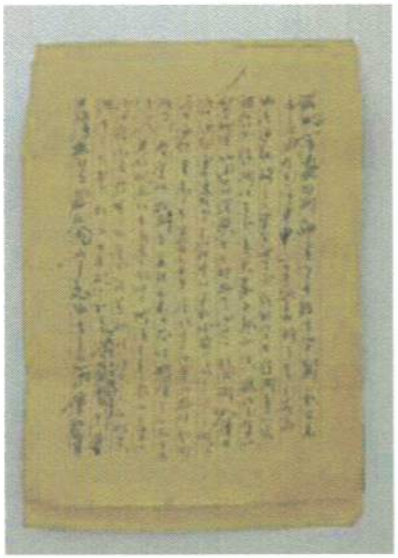
左：北野榮一さんの軍隊手帳

右：中井三郎兵衛さんの軍隊手帳

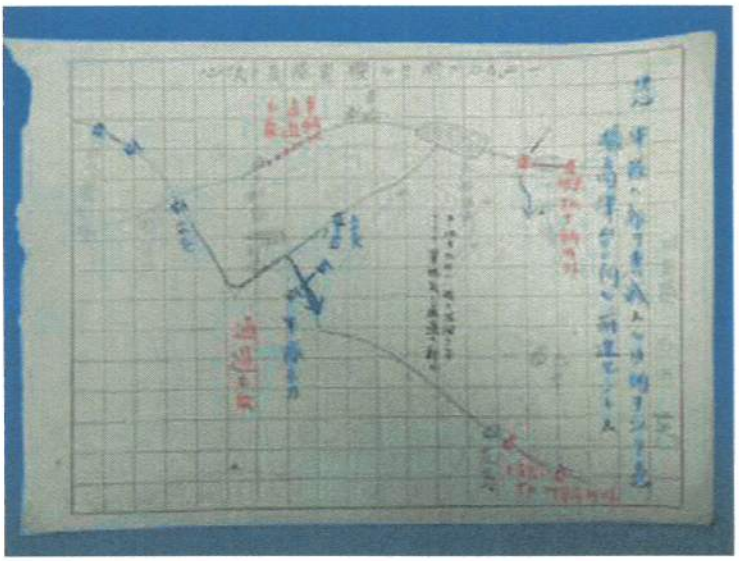
増田弘さんの遺書、田中光男さんが戦地で読んでいた冊子、吉田喜代次さんから妻雄子さんへの手紙、
上原四郎さんに送られた千人針、福島佐一さんの参考書『衛生兵必携』、万木清良さんの戦死公報（証明書）



帰国を許された部下（林左三氏）から上村重郎右衛門さんへの手紙



市田久治郎さんからご家族への最後の手紙



太田賢さんの図上の軍事演習メモ（手書きの軍事演習図）

第2章　フィリピンの戦場では

第1節　戦場となったフィリピン

ルソン島やミンダナオ島など7,000を超える熱帯の島々で構成されるフィリピン共和国は、タガログ族や華人など、多くの民族が共存する多民族国家です。言語は公用語のフィリピン語や英語のほか、172もの言語が話されています。

フィリピンは16世紀以降の長い間、スペインの植民地でしたが、米西戦争に勝利した米国が1898年にスペインからその統治権を譲り受けました。米国はプランテーション農園などによる経済的な支配を推し進める一方で、この地のインフラ整備に努めましたが、スペイン統治時代から続く住民の独立運動や自治を求める活動を鎮圧できませんでした。米国は1916年、フィリピン人による自治を認め、1934年にはタイディングス・マクダフィー法で10年後の完全独立を約束しました。

多くのフィリピンの住民が約2年半後にせまった独立を心待ちにしていた昭和16年（1941年）12月、突如、日本軍がフィリピンに攻め込みました。フィリピンの人々は、日米両国の戦争に巻き込まれて多数の方が犠牲になり、日本軍による徴用（強制労働）や食糧などの徴発（強制調達）にも苦しめられました。また、現地の風習を無視して日本文化や日本語を強要する日本軍の同化政策も住民の反感を買いました。

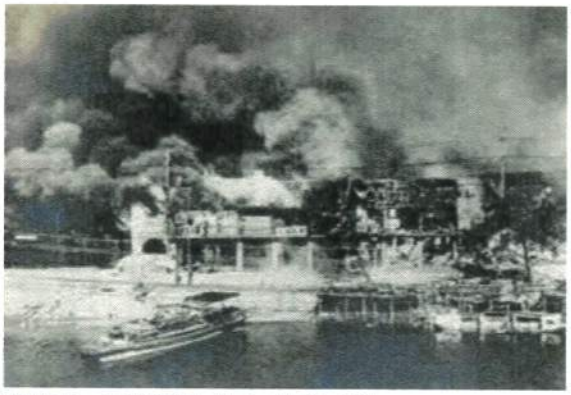
第2節　フィリピンでの戦争

米国の植民地であったフィリピンは、南太平洋の島々の石油やボーキサイトなどの天然資源を手中に収めたい日本軍にとって、前に立ちふさがる壁のような存在でした。

昭和16年（1941年）12月8日、日本軍は航空機によるフィリピンの米軍基地への奇襲攻撃を成功させます。フィリピン周辺の制空権・制海権を手中に収めた日本軍は約6万5千人の兵力をもって、ルソン島やミンダナオ島に進攻します。同年12月22日、滋賀県出身の多くの兵士が配属された陸軍第16師団を主力とする部隊がルソン島のリンガエン湾やラモン湾から上陸し、米軍部隊と交戦しながら中心都市マニラを目指しました。

昭和17年（1942年）1月2日、米軍はバターン半島へ撤退し、日本軍がマニラを占領しました。その後、バターン半島やコレヒドール島での戦闘を経て、同年6月9日にコレヒドール島の米軍が降伏しました。

日本はフィリピン全土の制圧を宣言しましたが、実際には、フィリピン各地で日本軍の占領・支配に抵抗する住民が民兵となり、武装抵抗運動を展開し続けました。その結果、地域の治安維持活動に動員された多くの兵士が、その後も民兵との戦闘によって犠牲となりました。



戦闘によって破壊されたフィリピンの街

フィリピン　集落を通る日本軍

昭和19年（1944年）10月20日、米軍はフィリピンを奪還するため、レイテ島へ上陸します。日本軍は、海軍によるレイテ島周辺での作戦行動（レイテ沖海戦）や多数の陸軍部隊の派遣によって、レイテ島での米軍の封じ込め・撃退を試みました。しかし、制空権を握り、物量に勝る米軍の攻撃によって、日本軍は惨敗し、12月15日にはミンドロ島への米軍上陸を許しました。

日本軍はレイテ島での戦争と並行して、ルソン島防衛のための陣地構築を急ぎましたが、昭和 20 年（1945 年）1 月 3 日には米軍がルソン島へ上陸します。日本軍はその後も敗退を重ね、3 月 3 日には米軍がマニラを占領します。

日本軍司令部がルソン島北部の山岳地帯に籠り、抗戦を続ける中、米軍はネグロス島やミンダナオ島にも戦線を拡大し、フィリピン各地で日本軍を敗走させていきました。

昭和 20 年（1945 年）8 月 15 日、戦争は終わりました。フィリピンの日本軍部隊・兵士はその後もしばらくの間、終戦を知らされず、飢えや感染症で命を危険に晒しながら敗走を続けました。

昭和 33 年（1958 年）に厚生省がまとめた資料には、フィリピンでの戦争に参加した日本軍兵士 630,967 人のうち、帰国できた人は 115,200 人だったと記されています。その後の調査によって、死者数などに変更が生じていますが、フィリピンへ送られた人のうち、おおむね 8 割前後の方が戦争の犠牲となったと考えられます。

戦死された田中為三郎さんの遺品
軍帽・ゲートル・ハガキ・銃入れ・煙草ケース

長谷井定次さんの寄せ書き日の丸

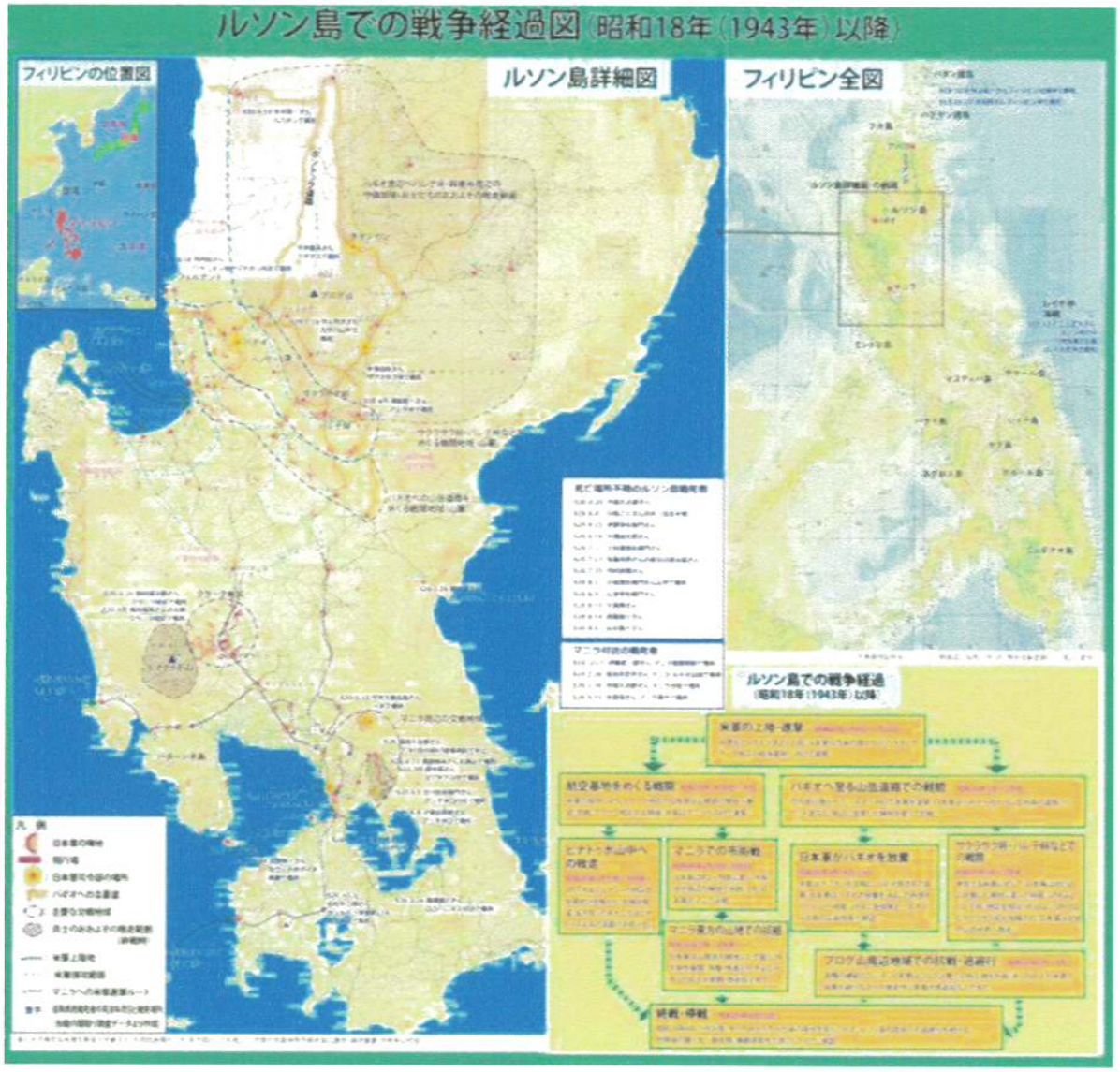
フィリピン戦年表

昭和 16 年（1941 年）
12 月 8 日　アジア・太平洋戦争が始まる
12 月 22 日　日本軍の主力がルソン島に上陸
フィリピンへの本格的な侵攻開始
【ルソン島で日米が交戦】
昭和 17 年（1942 年）
1 月 2 日　日本軍がマニラを占領
1 月 2 日～4 月 9 日　バターン半島で戦闘
6 月 9 日　コレヒドール島の米軍が降伏
日本軍がフィリピン全土を占領
【フィリピン人民兵との戦闘は継続】
昭和 18 年（1943 年）
9 月 25 日　レイテ島・サマール島が第 16 師団の守備地域となる
滋賀県出身兵士が多数、レイテ島へ移動
10 月 1 日　日本がフィリピンの独立を承認
昭和 19 年（1944 年）
【米軍反攻を準備】
9 月 9 日　マニラなどで空襲が始まる
10 月 20 日　米軍がレイテ島へ上陸
【レイテ島をめぐる両軍の激しい戦闘】
10 月 23 日～26 日　レイテ沖海戦　日本軍が敗北
【レイテ島をめぐる戦闘が終結】
12 月 15 日　米軍がミンドロ島へ上陸
戦火が拡大
12 月 25 日　日本軍がレイテ島の防衛を断念
第 16 師団を除き、撤退命令
昭和 20 年（1945 年）
【米軍がルソン島攻略へ向けて準備】

1月 3日 ルソン島の日本軍司令部がバギオへ撤退
1月 9日 米軍がルソン島に上陸
【ルソン島をめぐる両軍の激しい戦闘】
2月上旬～ルソン島の日本軍が北部の山間地で抗戦
3月 3日 米軍がマニラを占領
3月18日 米軍がパナイ島へ上陸
フィリピン全土に戦火が拡大
【米軍がフィリピン全土の制圧に着手】
3月29日 米軍がネグロス島へ上陸
4月16日 ルソン島の日本軍司令部がバギオから撤退
4月17日 米軍がミンダナオ島へ上陸
4月23日 ルソン島の日本軍がバギオから撤退
5月 9日 米軍がバレテ峠を攻略
5月19日 米軍がルソン島のサクラサク峠を攻略
5月30日 米軍がバレテ峠周辺を制圧
【フィリピン各地で日本軍兵士が敗走 飢餓と感染症で苦しむ】
6月頃～ ルソン島北部の日本軍兵士がプログ山周辺で逃避行
8月15日 終戦
【終戦を知らず日本軍兵士が逃避行】

フィリピンでの戦死者数

・防衛省防衛研修所戦史室の『戦史叢書 捷号陸軍作戦2 ルソン決戦』（昭和47年11月、朝雲新聞社発行）をもとに作成
・下図は『大東亜地図大系 フィリピン群島図』（昭和19年3月、博多成象堂発行）を使用



バナー：ルソン島での戦争経過図（昭和18年（1943年）以降）

（参考資料）召集令状【複製】

召集令状が届いた人は、否応もなく軍へ入隊させられました。通知書の色から『赤紙』と呼ばれました。

三好潔さんの小隊名簿

三好潔さんは、昭和16年（1941年）12月にフィリピンへ上陸した部隊に所属し、その後、ルソン島の警備隊で小隊長をされていました。

小隊名簿に記載されたほとんどの名前に線が引かれ、名前の上に『死亡』や『負傷』と追記されています。

第３節　フィリピンへ送られた滋賀県出身の兵士たち

戦前の日本では、国民皆兵制度のもと、健康な男子は 20 歳になると兵役につくことが義務付けられていました。

滋賀県で徴兵された人々は、京都師管区（滋賀や京都などの新兵への教育・訓練を担当し、配属先を決める陸軍の組織）からそれぞれの部隊へ送られました。昭和 16 年（1941 年）、京都師管区が編成・兵員補充を担当する第 16 師団がフィリピンを攻める主力部隊としてルソン島へ送られたため、多くの滋賀県出身兵士がフィリピン各地で戦うこととなりました。

日本軍の占領後、前線への中継基地となったフィリピンには、各地に基地や軍港、飛行場が造られ、多くの滋賀県出身兵士たちが送られました。戦況が悪化した昭和 19 年（1944 年）には、フィリピンの飛行場からそうした航空兵も米軍艦船への特攻（自爆攻撃）のため飛び立ちました。米軍のルソン島侵攻が迫った昭和 19 年（1944 年）、マニラ港に停泊中の艦船や軍港の警備の任務についていた滋賀県出身の海軍兵士もマニラ海軍防衛隊に組織され、米軍と市街戦を戦うこととなりました。

コレヒドール島の米軍降伏とフィリピンの人々【コレドル陥落記念】

昭和 17 年（1942 年）5 月 6 日、コレヒドール島の米軍守備隊が降伏し、フィリピン全土が日本軍の支配下におかれました。写真は日の丸を振る当時のフィリピンの人々の姿です。

【体験談ー召集されたことも秘密でした。—】

西堀 伊太郎さん（東近江市）

当時 27 歳だった西堀伊太郎さんの 3 回目の出征の様子です。

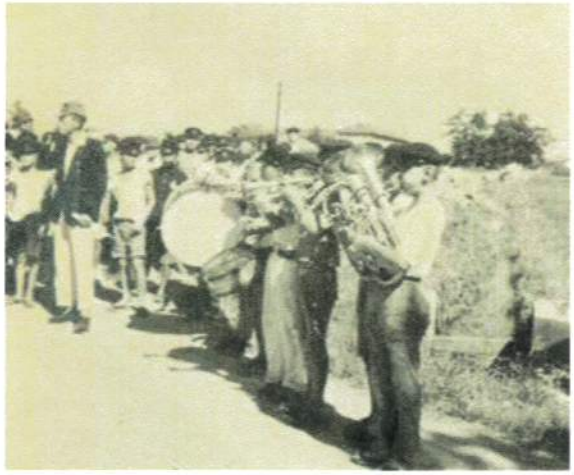
（太平洋）戦争が始まる前の秘密動員では、「誰にも言うことならん（誰にも言うな）」と言われたんや。

昭和 12 年（1937 年）、最初に入隊した時は、部落（集落）はもちろん、（西押立）村のみんなに愛知川駅まで送ってもらって、「万歳！万歳」と（送られながら）入隊したんや。押立神社の出征式では、村長があいさつして、（みんなに）万歳してもらって、（その後に一度、）家へ帰って来る。家では、親類やら心やすいの（親しい友人）がいて、宴会ですわ。そんで、（除隊して）戦争から帰ってきた時も、（たくさんの人たちが）愛知川まで迎えに来てくれたわ。

（昭和 16 年（1941 年）秋ころのフィリピン戦のための召集では、）仕事場に役場の兵事係が来て、ちょこんと（横に）座ったんです。それで「ピン」と来ましたわ。そしたら、ポケットからそれ（召集令状を）出して、わしのポケットに入れて「ご苦労さんやな」そして、「誰にも言うことならん」て、言ったんや。その程度でしたわ。（伏見の部隊へ向かう時も）兄貴（だけ）が八日市の駅で見送ってくれたんです。

（部隊がフィリピンへ向けて出発する時も、）船に乗れということで船に乗って、奄美大島の古仁屋という所まで「ずー」と行ったんです。12 月 13 日に船がそこを出港して、パラオを目指していくような動きして、直ぐに 90 度方向を変えて、ルソン島へ向かったんです。敵前の上陸やったけど、幸いにして、敵はおらんなんだ。

出征する高橋助男さん（昭和 13 年 豊郷駅にて）



兵士の出征を見送る北里村（近江八幡市）の子どもたち

フィリピンへ向かう輸送船団（昭和16年12月）

日本軍の輸送船団

【体験談ー日本軍のルソン島上陸ー命よりも大切なものー】　竹内 正二さん（大津市）

昭和16年（1941年）12月22日、竹内正二さん（当時21歳）が所属する歩兵第9連隊第3大隊は、米軍が待ち構えるルソン島へ敵前上陸を命じられました。

僕らの左側に上陸した第1大隊は向こう（米軍）からのものすごい集中砲火を浴びて、オリンピックの陸上競技の大江季雄選手も戦死したんや。一方、僕らの上陸地点には敵はいなかったけど、僕らの中隊だけでも7名ほどが死んだんや。全員、溺死やった。

上陸する時に本船に乗っている全員が一度に上陸できへんわね。上陸用船艇の乗員には限界があるから。それで、上陸用船艇をピストン輸送して、後続部隊を運ばんならんわな。いつ何時発砲されるかわからんから、上陸地点まで船を「ダー」と乗り上げられんかったんや。乗り上げたら、直ぐに引き返せないから、10～12メートル手前で船艇を止めるわけや。そして、船舶工兵がロープを持って岸まで上がると、完全武装した我々兵隊が船から飛び降りて上陸して行くわけやね。その時に僕らの中隊で7名ほど死んだわけや。何で死んだかと言うと、完全武装で飛び降りた時、巻き波が来て、倒れたんや。銃を持っているし、完全武装やから、倒れたら起き上がれへんわな。今だったら「まず命が大切や」と、銃を放って（手放して）、助かったかもしれん。身体一つやったら、武装をパッと取ったら良いと思うけども、そんな配慮が当時の軍隊にはなかったんや。悲しいかな、当時の兵隊は「人命よりも何よりも、お上から支給された銃が大切、背嚢や食料弾薬が大切だ、命よりも」というように皆が教育を受け、それについて何の抵抗感もなかったから、戦闘もせずに溺死したんですわ。結局、『戦争』というものはそんなもんや。

フィリピンの病院で療養中の竹内正二さん

【体験談ー戦闘、そして負傷ー】

竹内 正二さん（大津市）

ルソン島に上陸した竹内正二さんの部隊は、中心都市のマニラへ向けて進軍しました。

昭和16年（1941年）12月31日にうちの中隊の自転車小隊が奇襲を受けて、逃げて帰って来たんや。それで、僕らは小隊の救援に向かってたんや。1月1日の午後4時頃やったかな。ピナトゥボ火山のふもとのマガランという所やった。平坦なサトウキビ畑を進んでいたら「ダー」と、奇襲を受けたわけや。

向こう（米軍部隊）は壕（塹壕）の中で隠れて日本軍が来るのを待っていたんやな。皆、道路からパッと両側に散ったんや。僕が田んぼのそばの遮蔽物に隠れて、射撃体勢になった時やったと思う。近くで「パッ」と砲弾がさく裂したんや。隣を見たら、上等兵の顔が半分、「ボーン」と飛んでた。こっちもえらい衝撃を受けて、顔に手を当てたら真っ赤やった。「これはえらいこっちゃな」と思ったけど、両腕はきかんわ、顔は血だらけやし、「死ぬかなぁ。ちょっと早すぎるかなぁ。こんな筈やなかった。」と、走馬燈のようにクルクル思ったわ。人間誰しも自分がこんなに早く負傷し、死ぬとは思ってないから、思ったら戦場にいられへん。自分は（きっと大丈夫や）…と思ってたら、「ポーン」とやられてしもたんです。「あ～、しもた、こんなはずやなかった」て。

戦闘が続いてるうちに、日が暮れて、曳光弾も飛んで来てた。疲れと出血でウトウトとしながら、うつ伏せになって一晩そこにいたんや。次の朝方、「突撃しようか。どうのこうの」と言う声が聞こえてきたころ、敵も退却して行ったんや。朝に僕のような負傷者が5、6名収容されて、近くの壕で夕方まで寝かされてた。戦死者も2名出たんです。

僕の記憶ではね、敵はその時、（大）砲を持っていなかったんや。まぁ推測やけれど、友軍（日本軍の別部隊）の大隊砲（歩兵砲）が接近していたんや。射程距離が200～300mで、そのくらい接近してたと思う。ちょっと着弾距離を間違ったんやろね。その砲弾が「ドーン」と落ちて、その後、敵からは砲（弾）なんか、飛んで来なかったもんね。

我々兵隊の中では常識やけどね。「混戦になったら敵も味方も同士撃ち」、てなことがある。それは今も昔の戦争でもそうやわな。『戦争』なんてモノはそんなもんや。

竹内正二さんの両手のレントゲン写真（破片摘出後）

負傷した竹内正二さん

竹内正二さんの体内から摘出された砲弾片

戦場

上・下：リンガエン湾に上陸する日本軍
（昭和16年12月22日）

上陸用の船艇から海に降りる兵士たち（昭和17年）

戦場の兵士たち

【体験談ーフィリピン人の民兵に襲撃されてー】

辻井 武一さん（近江八幡市）

辻井武一さんの部隊は、ゲリラ戦で抵抗するフィリピン人の民兵を掃討するため、ルソン島南部のキャラモアーン半島へ送られました。

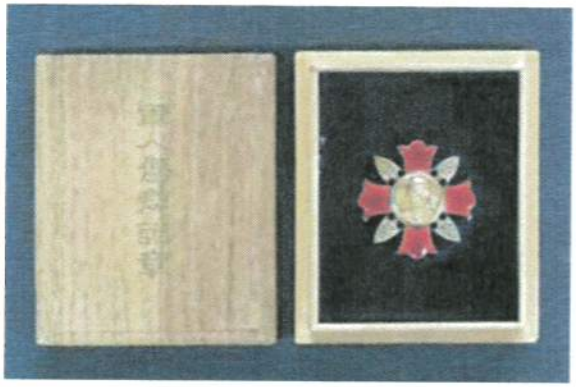
（米軍が降伏した後は、）「ゲリラが出た」といっては討伐に行ったりしましたんや。部隊が分散して、小さな街まで10人とか20人とかの（部）隊で行くわけです。でもね、ゲリラ（民兵）も現地人です。住民みたいな服を着て、銃やらは隠してますしね。普通はわからないですよ。よその国から来て、（日本軍が）統治するわけです。若い血気に走った者が（祖国を）奪回するため、襲撃してきたんです。

（警備地区では）本部から連絡船で港まで運んでくる食糧や弾薬、給料などを山の中（の道）を通って、月に1回、取りに行ってたんです。昭和18年（1943年）1月、山の上から手りゅう弾とかで襲撃されて、また、怪我したんです。目の前で手りゅう弾が爆発して、顔面や両上肢、胸部が爆傷で、両眼とも見えなくなりました。入院して1週間ほどして、眼帯を取ると、左眼がかすかに見えるだけで、右眼は全然見えなかったんです。そしたら、眼科専門の軍医が来られて、「君の眼は化膿してるから、化膿を放っておくと良い眼まで駄目になるから、ちょっと膿を取るから」と言って、右眼の摘出でした。その後、そこそこ良くなったら、「国のためやと思って、右眼をもう、あきらめてくれ。国としては、まあ出来るだけのことはしてもらえるから」と、引導を渡されたわけです。

その頃は、（ルソン島も）わりあい平和やったから、戦傷の人（戦争で負傷した入院患者）が少なかったんです。眼科に20人ほど（入院患者が）いましたが、戦傷関係の人は2人だけでしたね。院長回診なんかでも、戦傷関係（とそれ以外の患者）との、差別がものすごかったですな。それで、入院している間も、私らは戦傷関係ということで大事にはしてもらえました。でも、「片眼は健康でこのまま見えてほしい。この眼だけは助けておくれ」と、一生懸命祈っていましたね。

1月に怪我して、マニラの病院で摘出手術してもらって、4月に病院船で帰ってきました。病院船は

「いかなることがあっても、誰も攻撃が出来ない」という規定があって、真っ白に塗ってあったんです。三笠丸という病院船で富山に帰って来て、その後、東京の第1陸軍病院で『恩賜の義眼』を入れてもらったんです。



上：恩賜の義眼　　下：軍人傷痍記章

ルソン島での戦闘で負傷した辻井武一さんが帰国後、国からもらった義眼と勲章です。

南十字星（昭和17年6月15日比島派遣軍宣伝班発行）

占領後～米軍再上陸までの間は、フィリピンの戦火も比較的に穏やかでした。その頃、日本軍が発行した兵士向けの新聞『陣中新聞　南十字星』に掲載された兵士の投稿作品（短歌・俳句・文芸作品）などをまとめた冊子です。

資料寄贈者の堀池榮一さんの作品も掲載されています。

【体験談一前を行く輸送船が沈められました。一】

藤田 進さん（長浜市）

昭和19年（1944年）6月、大阪陸軍航空廠八日市分廠に勤めていた藤田進さん（当時18歳）は、マニラ航空廠へ転属となり、博多から輸送船に乗ってマニラへ向かうこととなりました。

博多から船団を組んで10隻の輸送船が行きましたんやけどな。普通の貨物船でな、1隻に5,000～6,000人は乗ってたやろな。もう、人でいっぱいでしたわ。私らの船は、もっと速力が出たらしいけど、一番遅い船に合わさなならんから、ゆっくりでしたんや。それ見て、「ああ、これはやられる（沈められる）なあ」と思ってました。その時分、米軍の潜水艦にやられた話、ようけ聞いてましたさかい。「お前らも、もう、お陀仏や。」て、言われてましたんや。

台湾までは無事に行けたんやけど、バシー海峡は魔の海でした。朝、私らが甲板で涼んでたら、「バアー」と水柱があがって、「ドーン」とものすごく揺れましたんや。私らの船がやられたと思ったら、前の船でした。そしたら次に、大きい魚形水雷（魚雷）が水の中を「サアー」っと、来たんです。透き通るようなきれいな水でしたから、よう見えるんです。「もうあかん。南無阿弥陀や」と思ったら、船の下をくぐって行きよったんです。あれは本当に「ヒャー」としたな。

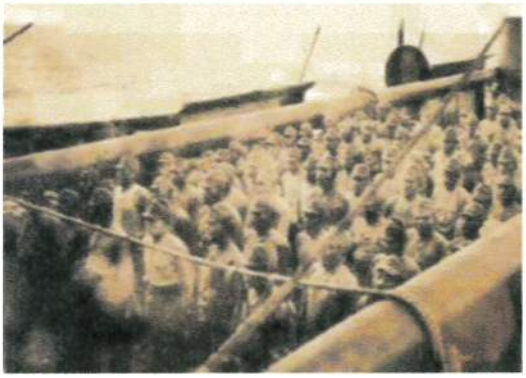
前の船は真ん中のちょっと後ろの方がやられて、沈んで行きました。そのスレスレをわしらの船が通ったさかい、船から（海に）飛び込まれる人も見ました。けど、船倉にいる人は、何段もの蚕の棚みたいな所に乗せられてたから、みんな、外へ出られませんわな。壮絶やったわ。船倉で「海ゆかば」とか、歌ってはりましたんや。私らは、かわいそうなその横で「南無阿弥陀仏…」て、唱えてました。

その後は船団、もうチリジリ、バラバラや。駆逐艦や海護艦もみな、逃げてもうたな。でも、沈んだ船はその1隻だけで、ほかの9隻はうまいことマニラに着きましたわ。

マニラに着いたら、なんかドロドロの服を着て、裸足で帽子もかぶってない兵隊がたくさん歩いてましたわ。恐らく、助けられた兵隊でっしゃろな。その後、私が乗った東山丸も「2ヶ月ほど後、南方か

らの帰りに沈んだ」と聞きましたわ。

輸送船上の兵士たち



輸送船の甲板で軍歌を歌う兵士たち

海軍機関兵のころの大塚源弥さん

【体験談ーフィリピンも勝つ見込みあらへんかった。ー】　大塚 源弥さん（高島市）

昭和19年（1944年）9月、海軍の機関兵だった大塚源弥さんはニューギニアの戦場から帰国したのも束の間、今度はフィリピンへ送られました。

今度はフィリピンのマニラに行ったんや。わしらが行った時は、フィリピンもあかんかったね。もう、勝つ見込みはあらへんかった。（到着の）翌日がマニラの初空襲や。グラマンという戦闘機が一日に400機も来よったんや。（マニラ港に停泊していた）輸送船や軍艦40隻のほとんどが空襲の爆撃でやられてしもた。軍艦は足が速いさかい、避難したのもあるけど、港内は油だらけや。油が浮いて、波に流されて、どこもかしこも油だらけやった。

わしは、もともと自動車の運転が好きやったから、海軍でも希望して自動車の講習を受けて、運転手になったんや。その頃、ほかの者は陣地構築とか、防空壕を掘ったりとかしてたけど、わしはトラックで材料を運んだりしてた。

ほんで昭和20年（1945年）4月20日、その道中（輸送中）に、ゲリラ（フィリピン人の民兵）が「バァ～ン」て、車を狙撃しよってん。登り坂でカーブがあるところやった。椰子林に蛸壺（1人用の塹壕）を掘って、坂を上がっていく車を狙って撃ちよったんや。わしらはトラック4台で走ってて、わしの車が一番前やった。隊長が「大塚が乗るんやったら、僕が助手席に乗るから」と、乗ってたんやけど、いっしょに撃たれたんや。わしは右肩やったけど、隊長は足をやられて…。その時は敵が撃ちよるから、かまってられる状況やなかったんや。どうなったか分からんけど、みんな捕まってるやろなぁ。

撃たれた時は「バァ～」と熱いお湯を掛けられたような感じやった。もう、手があらへん（なくなった）と思ったわ。幸い、車が一台動いたんで、車で引き返して（近くの）空き家で治療を受けてん。わしらの隊には衛生兵はいたけど、軍医もおれへん。傷もヨーチンを塗って、ガーゼを貼って、包帯を巻いただけや。そんなんで治ったんやで。

翌朝、百姓のおっさんが「米軍がそこまで来る」と、教えてくれたんや。「そらぁ、えらいこっちゃ」て、そんなもん勝てる見込みてあらへん。逃げる方法を考えてたら、「ガリガリガリガリ」て、戦車が侵入してきよったんや。ちょうど川があったんで、川に飛び込んで、川伝いに山へ逃げ込んだんや。

食糧は、缶詰と靴下に米を入れたものを2つほど持っていっただけや。その後は、昼は行動でけへんし、煙上げたら鉄砲で撃って来よるし、灯りも、煙も目立たんようにしてた。それに米はあるけど鍋、

釜なんか持ってへんから、米入れたる靴下を火の中で蒸して食べてたんや。ご飯というより、生米食うてたようなもんや。4ヶ月ほどそんな生活やった。降伏した時には、動けんようになったり、死んでしもたりして40人ほどいた仲間が30人足らずになってましたんや。

空襲を受けたマニラ湾

【体験談ー司令部がバギオへ撤退ー】

杉原 正雄さん（彦根市）

昭和19年（1944年）12月、少年通信兵としてフィリピンへ送られた杉原正雄さん（当時19歳）は、軍司令部のマニラからの撤退に伴ってバギオへ向かいました。

（マニラ郊外に）マッキンレーという元アメリカ軍の兵営があって、私らはその兵舎に宿泊して、次の命令を待ってたんです。今でも覚えてますけど、12月25日。クリスマスの日ですわ。バギオに転進（撤退）したんです。

南方軍の司令部はアメリカさん（米軍部隊）が来るということで、12月にはもう逃げとった。そのころ、われわれ（通信隊）の仲間で話してたんです。「あいつら（司令部）、トンズラが早いやないか」って。「しょうがないわ。わしらが通信を受けたの（情報が）参謀に入っていく（伝達される）んやさかいに」て、笑いあってた。

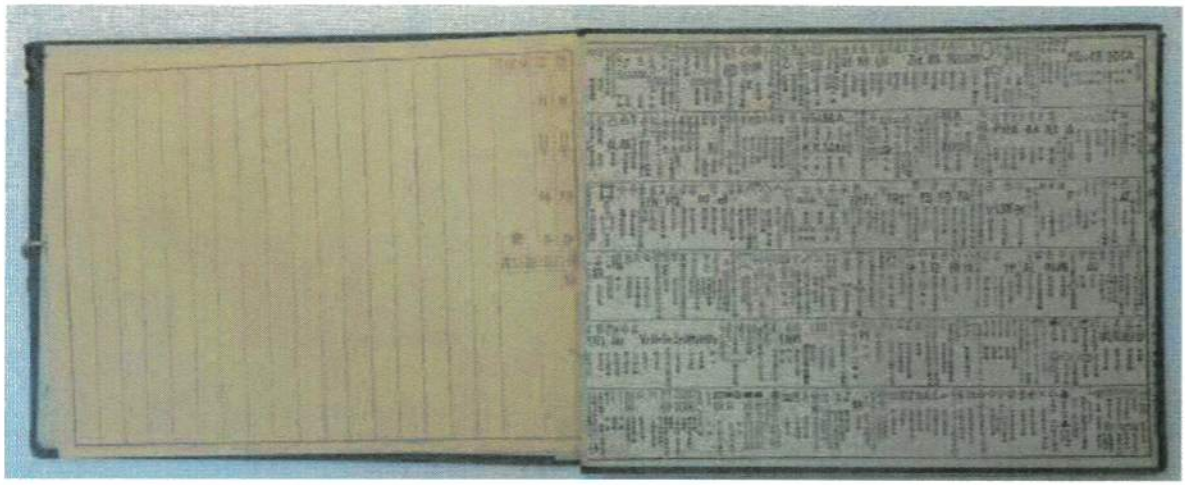
バギオには車で行ったんです。「車」でって、簡単に言ったけどな、バギオへ向かう道はベンゲット道という、すごい（つづら折れの）道で、日本で言うたら箱根のような険峻な山道なんです。うっそうとした森の中の道やった。トヨタや日産の軍用トラックでは一発で登りきらんのです。エンジン焼けるから冷やさんならんで、途中で2〜3回、休憩するんです。休憩する場所には自動車部隊（の整備兵）が先におって、谷間で汲んだ水をラジエターに一生懸命入れとった。

そんで、昼間は（爆撃されるから）走れんのです。制空権を取られとるで。それで、夜だけふた晩走って、バギオへ着いたんです。

フィリピンの山道を行くトラック

フィリピン山間部の道路

通信業務（気象観測隊）



通信紙（綴り）　通信兵が通信文を記録した通信紙です。

『軍人勅諭集　附戦陣訓』

軍人の規範を記した『戦陣訓』には、「どんな場合でも、捕虜となることを禁止する」といった内容が記されています。
戦争中だけでなく終戦後も、これを守った多くの人が投降を拒絶し、自らの命を断ちました。

【体験談ーフィリピンの住民と日本軍ー】

杉原 正雄さん（彦根市）

昭和 20 年（1945 年）1 月末ころ、杉原正雄さんたちは日本軍の通信所開設のため、ルソン島北部の村バンバンへ派遣されました。そこで、初めて目にするフィリピンの農村風景に驚きます。

2 月でしたけど向こう（バンバン）は寒さがないですからね。私ら、やっぱり田舎もんですね。（現地の住民が耕作している）田んぼ見たらね。「おお、稲ができたる（稲穂が実っている）で。どうよ、こっちは田植えしとるし」「いつ植えてもええんか、ここ。好きにやっとるとこやな」て、皆ワイワイ言うてね。

（そのころは）現地の住民ともね、仲良く交流してたんです。私らはサトウキビを絞る手伝いをしたりしてましたね。大きな石臼の先に竿が付いていて、牛がそれを引っ張って回しよるんです。石臼の中にサトウキビを入れる手伝いをして、けっこう楽しんでましたね。現地の人たちも「ジャポン、オー、トモダチ」とか言うてましたね。皆、一番最初に覚える言葉は「トモダチ」ですよ。私らもタガログ語で「イカオウ」（おまえ）とか、「イカオウ　サア　カア　プンタン?」（おまえどこ行くんや?）とか言うてましたね。平和なときは…。

エチアゲへ派遣されていた杉原正雄さんは、昭和 20 年（1945 年）5 月ころ、1 ヶ月ぶりにバンバンへ戻りました。

田んぼの真ん中のすごい広い（場所に）小屋がいっぱい建ってたんです。中には何千人も（のフィリピン人が）いました。エチアゲから帰って来たときやったから、知らんと小屋に入って、つぼに入ってる向こうの飯（収容者用のごはんを）食べてた。その時、何か気付いたんです。住民がみんな「じいっ」と、私の顔見よるんです。今まで（なかよく）付き合うてた感じと全然違って、何か、敵愾心がこもった目でした。「日本軍が、モンスターが来よった」という感じでしょうね。何かあるのかなと思ったんで、通信所でそのことを話したら、上官に「おまえ、（住民収容所の）中入って、よう生きて出て来られたな」て、言われたんです。「ええ、何ですか?」て聞いたら、「おまえ、あいつらみんな、住民みんなゲリラやで」て、その時はその意味が分からなんだ。

フィリピン　ルソン島の人びと

【体験談ープログ山中で分隊長に任命された理由ー】　　杉原 正雄さん（彦根市）

司令部がプログ山付近での徹底抗戦を計画するなか、昭和20年（1945年）7月、杉原正雄さんたちの通信隊（電信第27連隊）もプログ山麓へ向かいました。

（日本軍は）プログ山の方へ、どんどんと追い込められてました。私らは6月に入ってから一時、バヨンボンで通信（業務）に従事して、7月初めごろ、キヤンガンに入りました。司令部はドーンと奥の院（プログ山の奥深く）に入っちゃってますから、私らは司令部を訪ね、訪ねて行ってたわけですよ。

そこへ米軍の観測機がきましたね。セスナ機でゆっくり飛ぶやつですわ。集音マイクをワイヤで下ろして谷間を飛んで行き、話し声や物音だとかを収録する。そして、観測機が帰ったあとは「ヒュルヒュルヒュルヒュルーッ、ドカーンッ。」でね、撃ってくるのが半端じゃないんです。日本軍の砲兵が弾を込めて大砲1発撃つでしょ。向こう（米軍）は、テレビ（番組）のように「ズズズズーッ、ガガガガーッ」何発来るや分からん。もう、しっかりとね、撃ち込まれる。

それでもう、観測機が来るとみんな「じいっ」と、息飲んでじいっと見とるんです。だから、（敵機の）操縦士が谷間をね、のぞきよる時、ほんとにその顔が見えるんです。陰に隠れてちょっと。ええ。「おい、目と目と合わすなよ」とか言うてましたね。それが7月に山の中へ閉じ込められた時の状況でしたな。

この頃、私は分隊長になったんです。分隊長にしてもろたのはええけれどね、命令書もなければ任命書も何にもないんですよ。（通常、）通信分隊には時計と暗号帳が配られるんです。時計やら、暗号帳やら（通信文に時間を記載するための時計や暗号解読のための暗号帳）、みな全然、渡されない。そして（上官に）「通信（機）…は？」て、聞くと、（部隊の）誰かが、「ああ、持ってます」て、（上官から）直接渡されない。とにかく寄せ集めです。いわゆる指揮系統もね、全然もう乱れましてね。

それで、（上官に）「おまえ分隊長や。行ってこい」と言われたんですけど、「（口減らしのために）頑張ってこい」というのが本当なんです。私（の分隊）はただ員数（人数合わせのために）でつくられたんです。「行ってこい」と言われたけど、「どこへ行くのか、行ってどういうようにせい」ということは何にもない。ただ「行って来い」と。（部下にも）「もう杉原中尉について行ったらいいんや」と、（部隊に）食べるもんないから口減らしでした。

ルソン島山岳地域の棚田（ポントック地域）

フィリピンの伝統的な家屋

田植え（フィリピンの農村にて）

左・右：稲刈り（フィリピンの農村にて）

【体験談ー飢餓と感染症によってー】

杉原 正雄さん（彦根市）

ルソン島に送られた日本軍部隊の 63 万人がフィリピンで 14 万人まで減ったんです。大ざっぱに見て 49 万人ほど死んじゃってるんです。ほとんど餓死と疫病（感染症）です。マラリアやデング、アメーバ赤痢でみんな死んだんです。

私は下士官だったんで帯革を持ってました。それをハサミで一生懸命、刻んで、飯ごうに入れてふやかして。（そのままでは）油臭いで、油を取って、そして、炊いて食べた。そんで、靴あるでしょう。あれも革でしょ。ナイフで削る。その後、ハサミで切ってね…。みなさん、想像つかんでしょう。非常に下世話なグチですけどね、兵隊はほんとに尻の穴が見えるほど痩せてましたし、みんな栄養失調でした。私らは「後ろから梅干しの種が見えるね」て、お互いに大笑いしてましたわ。食う物なかったです。

プログ山は標高 2,900mくらいあります。周辺は山岳地帯でね。私ら（の部隊）は山裾のほうにいましたから、200～300m 上の方で暮らしていた連中（部隊）からの、それ（糞尿）がみんな谷間へ流れてくるんですね。何百メートルか谷間を流れてくると、受けるとね（下流で水を汲む時）、きれいに見えるんです。水が澄むから。それが曲者やったんです。その生水を飲んだら完全にアメーバ赤痢です。ところがね、「飲んだらあかん」と言うことは分かっててもね、マラリアや赤痢になると熱が出るし、のどが渇く。分かってても、「ちょっとぐらいは」って、その「ちょっと舐めただけ、ちょっと唇付けただけ」、それでもう赤痢になる。出るもんがないから、すぐ粘液便です。粘液便が出て、血の便。もう血便までいくともう終わりですな。あとは日にちの問題です。薬がないから。

私もちょうど山下りた時（終戦後に投降のために下山した時）はひどかったですね。そのときは、（アメーバ赤痢の症状の）最後の段階まで行ってたから。もう、死にかけてましたね。

マラリア malaria

マラリア原虫に寄生された蚊（ハマダラカ属）に刺されることで感染する病気です。1～4週間ほどの潜伏期間のあと、40度近くの高熱や悪寒などに繰り返し襲われます。脳症や腎症などを併発して死亡することもあります。

毎年、世界中で約2億2千万人が感染し、推計43万5千人が死亡（2018年11月公表の統計資料）しています。

予防方法

最も効果的な方法は、ハマダラカに刺されないことです。虫よけスプレーや感染防止の予防薬もありますが、服用していても感染する場合があります。マラリアが流行する地域では、蚊が活発に活動する時間帯（夕暮れから明け方）の外出をさけ、できる限り肌の露出を少なくしましょう。

治療方法

抗マラリア薬で治療することができます。

デング熱 Dengue Fever

デング熱は、デングウイルスを持つヒトスジシマカ（ヤブ蚊）などに刺されることで感染します。

2～14日の潜伏期間の後、発病すると40度近い高熱や激しい痛み（頭痛、筋肉痛）に襲われます。3～5日で熱が下がり、その際、発疹が現れます。

英語では Break bone fever（骨が折れるような痛みが襲う熱病）とも呼ばれています。

通常では死に至ることが少ない病気ですが、治療してもまれに重症化します。人から人へ直接感染することはありません。

予防・治療方法

治療薬はありますが、ワクチンやデングウイルスに特化した治療法はありません。最善の策は蚊に刺されないようにすることです。

アメーバ赤痢　Amebiasis

赤痢アメーバによる消化器の感染症です。病原体を含む感染者の糞便などに汚染された生水や加熱が不十分な食物を飲食することによって感染します。

感染後、通常2～4週で下痢や粘血便、しぶり腹（トイレにいった後でもすっきりせず、またトイレに行きたくなる状態）などの症状に襲われます。数日～数週間の間隔で症状が悪くなったりよくなったりします。

世界では毎年約10万人がこの病気により死亡しています。

予防方法

病気の流行地域では、生水、氷、生肉、生野菜などの飲食を避け、食事の前には十分に手洗いしましょう。

アメーバ赤痢のワクチンはありません。

治療方法

アメーバに対する治療薬があります。

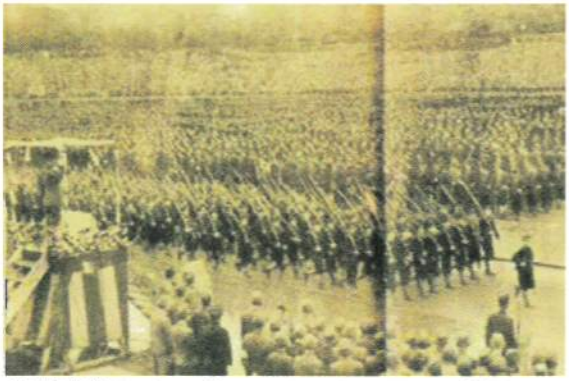
参考文献：厚生労働省検疫所ホームページ

水場で飯ごうを洗う兵士

杉原正雄さんが口にした食物？・飲料水!!

革ベルト、軍靴（右足）、水筒

杉原正雄さんたち日本軍の兵士は、食料のない中、プログ山麓に敗走しました。空腹に耐えかねた杉原正雄さんは、帯革（革製のベルトなど）や靴まで細かく刻んで食べたそうです。兵士たちの飲み水は谷川の水を汲んだものでしたが、その水も赤痢アメーバに汚染されていました。



「出陣学徒壮行会」の様子（昭和18年10月21日撮影）

【体験談ー部隊への配属を命ず（但し、移動時の食料等の補給は行わない）ー】

磯田 英夫さん（大津市）

大阪市立商科大学（現在の大阪市立大学）在学中に学徒出陣された磯田英夫さん（当時19歳）は、幹部候補生としてマニラの教育隊へ派遣されました。昭和20年（1945年）1月頃、400km以上離れたルソン島の北端に到着する部隊への配属命令を受け、仲間といっしょに、歩いて部隊へ向かいました。

僕ら15～20人ほど（の下士官）が部隊に派遣されるため、マニラから山の中を単独で行動してたんです。僕ら、薬はもちろん、糧秣（食料）の補給もありませんから、みんな栄養失調になってました。

山の中にはものすごく急峻なとこに棚田があって、わりかたお米がよくとれたんです。それで、現地住民が隠しとく米を漁ったり、放牧しときよる牛を鉄砲で撃って殺して、飼ってる鶏も…。そうやって自活してたんです。でも、現地住民だけやなしに、ゲリラ（フィリピン人の民兵）もいて、それがまた強いんですわ。日本兵の死体から鉄砲を奪ってましたね。そして、少人数の兵士が通ったら、弓や槍だけやなしに、奪った日本の鉄砲で撃ってくる、とかでしたね。

（そうした生活でしたから）やっぱりマラリアにかかった。マラリアにかかると、同じような時間（定期的）に震えがくるんですわ。熱が出てくる。食べ物が入りませんわな。昼は暑いけど、山の中やからね。夜になると、やっぱり冷えてくるんです。外套を着て、ごろ寝でした。水を沸かすために火を点けると、煙が出るから（米軍機に見つかって攻撃され

るため)、生水を飲むことが多なりますわね。それで生水を飲むとアメーバ赤痢という下痢になる。マラリアにかかって、アメーバ赤痢にかかってね。自分もマラリアとアメーバ赤痢にかかってたから、(病気が悪化した) 戦友を助けることできんかった。仲間がある日、朝起きたら元気になって、しゃべってたんや。死ぬ前にはええ目を見せるちゅうやつや。翌日になったら、もう「ガチーン」て、冷たくなって死んどった。

僕もね、戦友に「お前はもう死ぬと思ってた」と言われたんです。それほど衰弱してたけど、ある日、突然、僕も元気になってね。いつも (の場合) やったら死んでる (ケースや) ね。自分でも「もう死ぬんだ」と思てるのにね。もの (食事) も自分で作って食べられるようになってきてね。そして、元気になって今日があるんですわ。

水牛に乗るフィリピンの人々

米軍機から発射された機銃弾と日本軍の鉄カブト

左：機銃弾の弾頭と薬莢　　右：陸軍鉄帽

第3章　無言の帰郷　戦死の知らせ

バナー：戦死者を迎えて（公葬）

フィリピンで戦死した寺田松太郎さんの京都での部隊葬（昭和18年9月17日）

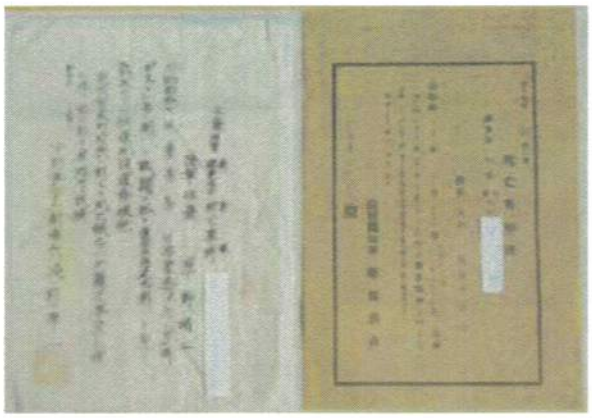
公葬　戦死者を迎えて

戦争中、戦死者の葬儀は親族によるものだけでなく、地域が主催する合同葬（市町村葬）や部隊の葬儀（部隊葬）など、様々な形で執り行われました。そうした葬儀は、親族や地域の親しい知人、戦友の死を悼む想いがある一方で、戦死者を『国のために命を捧げた模範的な兵士』として称え、『国のために尽くす素晴らしさ』を多くの人たちに周知する場でもありました。

地域による公葬（市町村葬）は、市町村長が公費を使って主催し、知事や軍関係者、多数の地域団体などから弔辞や香典が送られるとともに、大勢の人々が参加する地域を挙げた式典でした。子どもたちも『国に命を捧げる素晴らしさ』を学ぶ場として、学校を通じて参列を求められました。

戦況が悪化し、戦地からの輸送が難しくなった昭和19年（1944年）以降、そうした葬儀は少なくなりました。戦争が終わり、戦地の情報が国内へ届くようになると、滋賀県各地でも戦死者へ哀悼の意を表する公葬が再開されました。

多くの戦死者の遺骨箱は、公葬のあとで家族に引き渡されました。箱の中身は遺骨の代わりに、名前を記した紙きれや戦地の小石、木切れなどが入っていることが多かったそうです。



家族のもとに届いた戦死の知らせ『戦死公報』

戦死者の家族には、戦時中は所属部隊から、戦後はその業務を引継いだ地方世話部（知事名）から戦死した年月日と戦死場所が記された『戦死公報』が届きました。

左：中部第36部隊長からご家族へ送られた戦死の知らせ
（昭和17年6月24日）

右：死亡告知書（昭和23年11月25日付）

村葬

戦死した家族を迎えて（自宅での葬儀）

村葬　無言の凱旋（戦死者　遺骨箱の帰郷）

村葬　自宅からの出棺（昭和18年4月）

地域をあげての『公葬』　村葬資料

「昭和16年 公葬に関する書類」（旧伴谷村、今の甲賀市内）
「供物役割」（昭和18年9月26日の村葬）
「故陸軍伍長勲八等　草野唱二君　村葬儀次第」
弔辞（昭和19年1月28日、小佐治区長　吉治長三郎）
各団体、関係者からの弔辞8点

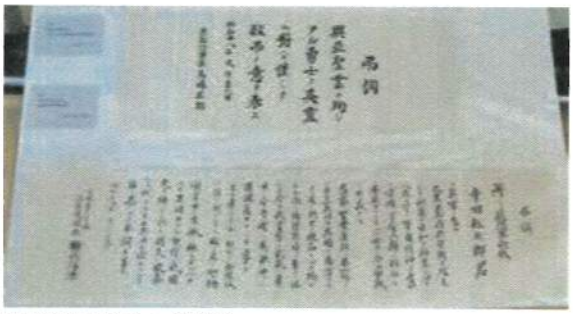
戦死者の遺骨箱を迎えての『公葬』（市葬・町葬・村葬）は、市町村長や在郷軍人会が中心となって、公金を支出する公的な行事として執り行われました。『昭和16年公葬に関する書類　伴谷村』は伴谷村（現在の甲賀市の一部）での公葬のマニュアルです。地域での公葬では、師団長や大津連隊区司令部、知事、県会議長などの有力者から、多くの弔辞が寄せられましたが、通常の場合、代理人が代読することが多かったようです。

木札　師団長、聯隊長、日本赤十字滋賀支部長、甲賀郡自治協会長

御供物料包　陸軍大臣、師団長、部隊長

弔慰料　滋賀県知事、供華料　甲賀郡自治協会

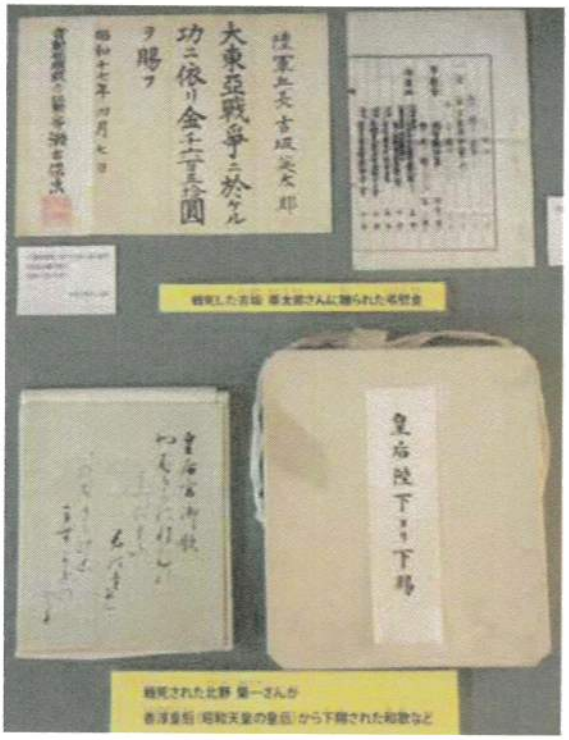
村葬で北野榮一さんに供えられた香典など　20点



寺田松太郎さんへの弔辞

上：京都師団長　馬場正郎氏の弔辞（昭和18年9月26日）

下：日本赤十字社滋賀支部長　菊池盛登氏（当時の滋賀県知事）の弔辞（昭和18年9月26日）



死者やご遺族に贈られたモノ

戦死した吉坂英太郎さんに贈られた弔慰金

「大東亜戦争ニ於ケル功ニ依リ金千六百五拾圓ヲ賜フ」（昭和17年4月7日）・弔慰金等受領書

戦死された北野榮一さんが香淳皇后（昭和天皇の皇后）から下賜された和歌など　皇后宮御歌（箱入り）

【体験談ー兄弟2人の戦死と葬儀ー】

勝井 吉男さん（甲賀市）

勝井吉男さんは、2人の兄弟を戦争で亡くされました。

わしは五男やったけど、他は小さい頃に死んだから、残ったのは兄と弟とわしだけやった。その2人も戦死したから、残ったのはわしだけや。

昭和13年（1938年）9月15日、兄は（日中戦争で）27歳の時に死んだんや。そのころは日本軍が破竹の勢いで勝ってた。兄貴は南京や徐州、漢口といった花形の戦い（大規模な戦闘）に全部参加しとって、漢口の戦いが終わったら、兵員の入れ替えで帰れるとこやったけど、最後のとこでやられた（戦死した）んや。

そのころは勝ち戦やったから、すぐに戦死の公報がきたわ。印鑑や財布、時計やらの遺品も帰ってきた。部落（集落）で戦死したのは、わしの兄貴だけ

やったから、葬式は村葬やった。後に続く兵隊（その後に出征する兵士たち）が、「（自分が戦死しても）あんなにあんばい（これほど立派な葬儀を）してもらえるんやったら、いつ死んでもだんないわ（大丈夫や）」という気持ちになるような扱い（葬儀）やった。そうせな、後が続かへんやろ。

わしの兄貴は伍長やったけど、この葬式が（戦争の期間を通して村で）一番たいそうな（立派な村葬）やった。場所は小学校の体育館で、村中全部（の人）が参列してくれた。天皇陛下からのお供え物も来たし、陸軍大臣の代理も弔問に来られた。各種団体もみな弔問にきやはったから、うちの家からずっと向こうの方まで人がいっぱいで、道が通行止めになったんや。辻々（街角のあちこち）には「名誉の戦死者勝井爲治郎宅」と書いた張り紙が貼られて、滋賀県だけと違って、三重県やとか岐阜県からも香典がきたんや。

兄弟が死んだんや。本当は悲しかった。けどな、両親も僕も表向きは「名誉なことや」と喜んで見せてたんや。国民の一員として、そんな対応せんならん世の中になってたんや。

一方、同じく戦死した弟さんの死後の扱いは、兄の爲治郎さんと対照的なものとなりました。

弟は（戦況が悪化した）昭和19年（1944年）にレイテ島で死んだんや。徴兵検査で甲種（合格）やったから、昭和18年（1943年）にすぐに召集がきた。敵が上陸してくるまでは（フィリピンから）ハガキが来てたけどな、向こうに行って1年ちょっとぐらいで戦死したんや。でも、戦死公報（戦死の知らせ）来たんが、戦争が終わってから2年ほど後の昭和22年（1947年）や。それまでは、（弟が）どこにいるのかさえわからへんかった。戦死公報が来て、始めて「レイテ島にいたんか」て、わかったんや。（遺骨箱には）遺骨はなかった。申しわけみたいな物やな。（箱の中身は）戦死した所の石ころやった。

両親は戦争で、息子2人を亡くした親という『悲しい味』を味わったんや。

伴谷村の『村葬』に使われた造花（ハス・キク）、御幣

第4章　従軍看護婦

男性のみが兵役の義務を負っていた戦前の日本において、召集令状によって戦地へ送られた女性たちがいます。日本赤十字社や軍に所属する看護婦は召集に応じ、従軍看護婦として戦地で働くことを求められました。兵士と同様、彼女たちには召集に対する拒否権がなく、夫や幼い我が子を残してでも従軍しなければなりませんでした。

奥村モト子さんたちが所属した日本赤十字社は、明治10年（1877年）の西南戦争での救護活動に起源をもつ組織で、戦争や災害で苦しむ人々を敵味方の区別なく救護するために設立されました。日清戦争以降、日本軍の医療活動を支える組織として、多くの戦場へ看護婦などの日本赤十字社救護員を送り出しました。

日中戦争からアジア・太平洋戦争の期間（昭和12年（1937年）～昭和20年（1945年）末まで）に戦争で亡くなられた日赤救護員は1,187人に及びます。また戦後も、海外からの引揚げ者を運ぶ病院船での勤務や、内乱状態となった中国での更なる従軍、ソ連での抑留などによって亡くなられた方もいます。

パナー：従軍看護婦と傷病兵たち（マニラの病院にて）

第1節　従軍看護婦　奥村モト子さんの戦場

【体験談―フィリピンで待ち受けていた現実―】

奥村 モト子さん（大津市）

朝鮮半島のソウルの女学校で学んでいた奥村モト子さんは、日本赤十字社の映画を見て、従軍看護婦（日本赤十字社救護看護婦）にあこがれました。

卒業前にね、病院船に乗って、かいがいしく働いている看護婦さんたちの映画を、日本赤十字社が女学校に持ってきてね、みんなに見せたんですよ。ほんで「こういうお仕事、どうですか？」と言うてね。みんな「看護婦になるんだ」と感激してねぇ。それで父親の反対を押し切って、卒業後に日赤の看護学校に入ったんです。

（戦争中は）日本赤十字社が軍の配下になってしまっていたの。だから、昭和19年（1944年）3月に卒業すると、すぐに召集令状が来たんです。でも当時は、みんな早く戦場に行きたかったのよ。私たちはナイチンゲールにあこがれて戦場へ行ったんです。

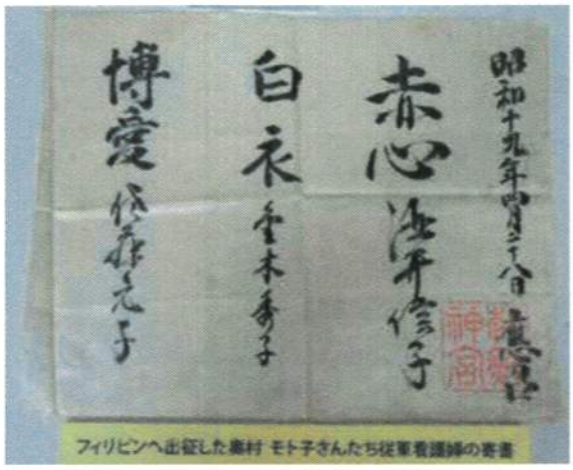
奥村モト子さんは従軍看護婦として、マニラにあった陸軍第63兵站病院で勤務することとなりました。奥村さんたちの寄宿舎は、現地の豪邸を日本軍が接収したものでした。

マニラの寄宿舎には、グランドピアノとかあってねぇ。シャンデリアが輝いていて、電気冷蔵庫もあって、びっくりしたわ。日本では、冷蔵庫なんてなくて、氷の塊を置いといて冷やしてましたから。それから水洗便所にはびっくりしました。「腰かける」なんて知りませんもんね。「これ、どう使うの？」と、みんなで（便座の）上に上がって、「こんなん、やりにくいなぁ」と、笑ってましたねぇ。

でも、私たちはマニラで、いきなり伝染病病棟で働くことになったのよ。そこにはガダルカナル島から送られてきた赤痢と腸チフスの伝染病患者がいたんです。赤痢の患者なんか、1日に90回ぐらいウンコが出るんです。それに粘血便でしょ。ひどいもんでしたよ。けど、（先輩から）「赤痢とか腸チフスとか（の病原体）は口から入るものだから、それさえ予防してたら、絶対大丈夫だからね、だから介護してるもんが病気にかかったというのが一番の恥だからね」と、言われたの。だから徹底して、鉛筆でも、消毒してね、もう、手洗いから何から十分消毒して、一人も感染しませんでした。でも、マラリアとか、デング熱は蚊に刺される（とうつる）でしょ。だから、そういう病気では苦しみましたわ。デング熱なんか、もう40度以上の熱が出て、湿疹も出て、そんなのでも働いてました。

その頃は、やっぱり緊張しとったからかなぁ。激務でしたけどね、「これがえらい（苦しい）」とか、グチはいっさいありませんでしたね。いやだとも思わなかった。

フィリピンへ派遣された奥村さんたち従軍看護婦
（後列が奥村モト子さん・男性は日赤看護学校の教官、昭和19年4月撮影）



奥村モト子さん関係資料

上：フィリピンへ出征した奥村モト子さんたち従軍看護婦の寄書

下：著奥村モト子『嘆きのサザンクロス』

【体験談ー空襲、そして病院も移動したのー】

奥村 モト子さん（大津市）

昭和 19 年（1944 年）9 月、奥村さんたちがいたマニラも戦場となります。

それまで敵の飛行機なんか1つも見たこともなかったわ。平和だと思ってたら、突然、大空襲にあったの。前日に「明日は実弾演習があるから早く仕事を切り上げて、演習を見学するように」という命令があったんです。その日、元気な患者さんたちはお座布団なんかをもって、病院の屋根の上で見てました。そうしたら、(飛行機に) アメリカのマークが見えたんです。ガダルカナルを経験した患者さんは、大きな声で「だまされた～！だまされた～！敵さんだ～！米軍の飛行機ばっかりや、こりゃぁ、一大事や。大変なことになる！！」て、玉砕するぐらいすっごく叩かれた人たちだからよく判ってました。それで、「病院を移動せよ」という命令が出て、北部の方の山岳地帯に向かったんです。

最初の犠牲者は、マニラから北部ルソンまで逃げる時にやられたんですよ。その頃はまだ、乗用車があったんです。私たちはトラックの荷台に積んだ荷物の上に乗っとったんです。でも、友達がとっても弱っとったから、隊長さんの乗用車に乗せてもらったんです。ところが、車に酔っちゃて。それで、「トラックの方が風が吹いて気持ちいいから、替わってくれ」って言われて、替わってあげたんです。そのトラックがやられたんです。

移動は夜中だけ走ってね、明け方になったら、その辺の木やらを切ってきてトラックに被せて待避してたの。でも、そのトラックがみんなから遅れたのよ。「まだ朝だから（まだ）いいだろう」と走ってたら、敵にやられてね。(敵機が)「バリバリ」と次から、次から来て、トラックが炎上したの。

その時にね、1 人即死してるんですよ。それが鉄かぶとを被っているのに、弾が後頭部から前に抜けて。弾は先が尖ってるでしょ。だから、傷はほんのちょっとなんです。でも、炸裂して頭蓋骨が「バァッ」と割れるの。「1 人やられたそうだ」と聞いた時、私は責任を感じて、「まぁ、どうしよう、あの人が死んでたら申し訳ない」と思ってたんです。でも、その人じゃなくて、先輩でした。それが初めての戦死者です。

婦長さんがその人の手の先を切ってね。みんなで林の中で焼いて、骨にしたの。煙が出ると、敵にわかるので、なんぼ燃やしても、燃やしても、骨にならなかったの。肉を灰にするのは大変なんですよ。

でも、その人が一番幸せでした。一番最初だったから、そうやって骨にしてもらえて。でも、その骨も逃げてる途中で川に流れてしもた…。

トラックの荷台に乗る従軍看護婦と衛生兵たち
（中国の戦場にて）

フィリピンの戦場で使われたトラックと乗用車

【体験談－病院が攻撃を受けた理由－】

奥村 モト子さん（大津市）

奥村モト子さんたちが傷病兵たちを献身的に看護していた戦場の病院も、容赦なく空爆対象となりました。

最初のころはまだお米があったんで、朝2時ころに起きて、おにぎりを握って、朝、患者さんに1個ずつ配ったの。配り終わると、今度は患者さんを1人ずつ担架に乗せて、林の中に連れて行って寝させるの。40人くらいいたから、次々と。まぁ、衛生兵も手伝ってくれましたけどね。私らフラフラで落としそうになりましたわ。そやけど、朝、運んで、また、夕方運んで、そりゃぁ、もう大変ですよ。

「なんで、そんなことをしたのか」というと、病院が狙われてたのよ。毎日のように敵機が飛んで来て、9時ころから夕方まで、ずっと弾を落とすのよ。病院は屋根に大きく赤十字のマークをつけてたんです。赤十字のマークをつけたら、国際法で安全だと思うわね。でも当時、日本軍が病院船で元気な兵隊に白衣を着せて、船倉に武器を積んで、「いかにも病院船ですよ」という風にして運んでいたんですよ。それがばれて病院も狙われるようになったの。

動かせない重傷患者がいると、患者さんを守るため、当番の看護婦が病院に残っていたの。ある日、（攻撃がやんで）戻ったら、病院は燃えてて、影も形もなかったわ。爆弾が跳ね上げた土砂で友達が埋まってて、私ら掘り起こしました。「なんとか助からないかなぁ」と思って。でも、窒息死でした。窒息死するとね、硬直しないで、クニャクニャしてるんです。だから、脈はなくともねぇ、なんか生き返るような気がしてねぇ。ほんでマッサージしたり、鷹の爪を口の中に入れてみたり、いろいろやってみたけど、駄目でした。

私が当番の時には、病院が機銃掃射で「ダッダッダッダァ」と撃たれて、燃え出したの。患者さんに「看護婦さん、早く逃げてください。自分らいいですよ。僕らのために元気な人が犠牲になったら、いかんから。逃げてください」と何回も言われたけどかわいそうで、「はい、そうですか」といって逃げる気がしなかったわ。

尿器もなにもないから重症患者さんのオシッコを竹筒にたくさん貯めとったんです。それをとっさに思い出して、オシッコをかけて火を消したの。あとで隊長さんに「ええことした。病院が燃えんで良かった」言われましたけどね。

【体験談－薬もない中で－】

奥村 モト子さん（大津市）

フィリピンの山岳地帯を逃げまどう病院で、奥村モト子さんが目撃したこの世の地獄です。

病院には薬品やら、包帯・ガーゼやらがもう全然なかったの。激戦地から患者さんが運んでこられても、どうもしょうもないの。私はバナナの葉っぱを切っておしめカバーの代わりにしたり、患者さんのシャツやらを破ったりして、包帯の代わりにしてたの。

激戦地から運ばれてくる患者さんにはガス壊疽や敗血症、破傷風の患者も多くいました。破傷風はうつるでしょ。だからね、意識がなくなってきたら、

まだ死んでなくっても衛生兵が埋めたんですよ。うつるから。そうするとね、野良犬が掘り返して、足やらをくわえて、あんなもん食べるのかなぁ。もう、この世の地獄やった。

破傷風（はしょうふう） Tetanus

破傷風は、傷口から破傷風菌が身体入ることによって感染します。破傷風菌は日本の土の中にも多く生息しています。不衛生な病院での医療行為で感染することもあります。

感染すると3～21日間の無症状の後、口を開けにくい、首筋が張る、体が痛いなどの症状があらわれます。治療が遅れると体のしびれや痛みが体全体に広がり、全身を弓なりに反らせる姿勢や呼吸困難が現れたのちに死亡します。

予防方法

予防接種があり、正しい方法で接種を行うと免疫が10年間持続します。

治療方法

発病した患者には、治療のための血清や抗菌剤を投与します。

参考文献：厚生労働省検疫所ホームページ

【体験談ー病院最後の日ー】

奥村 モト子さん（大津市）

奥村モト子さんたちの病院も最後の時を迎えます。

患者さんに看病らしきものをしてたのは、昭和20年（1945年）6月まででした。その頃、難攻不落だと言われたバレテ峠のふもとで兵站病院を開設しとったんです。「バレテ峠が落ちたらフィリピンはもう駄目だ」と言われてたんですが、それが落ちてしまって、兵隊さんたちが「バァ」と、雪崩をうって、私らの麓の病院を置いて逃げてしまったんです。

国道の少し入った所に私たちは病院を開設してたもんやから、兵隊さんが逃げて行くのを見てないんです。負け戦ということも知らないんで、そこまで戦車が来てるのも分からなかったんです。けど、「おかしいなぁ」と思ったのは、向こう（敵軍）が病院を通り越して、ずうっと北の方へ向かって迫撃砲を撃ってたんです。患者さんも「これ、おかしなことになったぞ。わしらの頭の上を通って（砲弾が）行くということは日本軍が向こう（病院よりも後方）にいるんだ」と言ってました。そしたら、6月6日に「今晩のうちに逃げなかったら、明日には戦車が来る。今晩のうちに逃げてくれ」って、命令が出たんです。「まぁ、えらいことになったなぁ」ということで、患者さんを置き去りにして、看護婦だけで逃げようかということになったんです。

そして、「歩けるもんは全部、自力で歩け」と、置き去りにしていったの。でも結局、（歩けない）患者さんを殺したわけやねぇ。「私らにせえ」と言われたけど、「私ら赤十字の看護婦はそんなことは絶対できない、敵にも味方にもみんな同じように看護するという精神で来てるのに。あなた達がしてくれ」と拒否したんですよ。それで衛生兵が薬がないから、空気を血管に注射器で打って、それとかクレゾール（消毒液）とかねぇ。その頃になると、患者さんも「もう僕らだめです。僕らのために元気な人を犠牲にできないから、もう置いて行ってください」という人やら、「助けてくれ！連れていってくれ！」という人やら、いろいろでした。

患者さんたちはね、明治神宮の外苑で学徒出陣した学徒兵だったんですよ。その人たちがフィリピンに来たときには、もう負け戦でね、ただ「逃げろ」と言われて、フラフラになって私らの病院に来たんです。それが終いには病院が離散したから、元気なもんだけ逃げて、患者さん、置き去りですよ。「悪いなぁ」と思いましたねぇ。

でも、置き去りにされた患者さんたちは、肩を貸しあって、逃げてたんです。戦後30年以上経ってからかなぁ。「捕虜病院の会」をしたときに、その人が訪ねてきたのよ。「看護婦さんがいつでも、朝になったら、お水はだめだから、と言って、お湯を沸かして、毎日水筒に入れて持って来てくれた。それで、歩けなかったら死ぬしかないよ、と言いながら、歩行を練習させてくれたし。あの人たちが生き残っているのなら、会いたいと思って来たんです」って、いらっしゃったの。でも、私らはね、「ごめんなぁ、ごめんなぁ」と言うてね、もう、ほんまに肩身が狭かったわ。置いていった人たちだから。

【体験談ープログ山麓とその周辺ではー】

奥村 モト子さん（大津市）

奥村モト子さんたちが体験したプログ山麓周辺でのできごとです。

私たちは看護婦だけで逃げていました。白衣を着

てたら目立つでしょ。それで、はじめの頃は白い服を草木染めで染めたりしてたの。でも、直ぐボロボロになってね、逃げていく時になんぼでも死体があるから、死んだ人の服を取って着るわけ。でも、一番先にとられるのは靴なのよ。靴が駄目になっても、歩いて行かんならんから、靴が一番貴重なんやね。だから死んだ人がいたら靴を争って取ってたわ。「自分はそれだけは…」と思ったから、裸足で歩いてたわ。死んでると思って盗りに行った人がいるんだけど、そしたら「生きてるぞ〜」と言われて、飛んで逃げて行ったの。虫の息で「まだ生きてるぞ〜」と言われた時はぞっとして、もう靴は誰のも盗らんと思った。て。そう言ってた人がいるけどね。

戦場には軍の指示に従って、一緒に避難してきた在留邦人もいました。

子ども連れのお母さんが銃撃で足やられて歩けなくなっていたんです。お母さんが子どもたちに「あんたたちだけで行きなさい」て、言いながら、私たちにも「あの子、頼みます」と頼むんです。でも、もう自分だけで精一杯。人間の神経がなくなって…。本当に…かわいそうでした。

赤ちゃんをおんぶしたお母さんが亡くなっているのを見たこともありました。負いヒモから這い出した赤ちゃんがお乳をしゃぶってる。だけど、もう死体だから硬くなってて、お乳なんか出ないから、ワンワン泣いてるんですよ。もう、ほんとに地獄や。恐らくは、その子たちはどこかで亡くなってるでしょうねぇ。奥地（敗走先の山間部）で子どもなんて見たことないもん。

追い詰められた奥村さんたちは死を考えました。

そのころ、一番困ったのは塩でした。「死ぬんだったら塩をなめたい」と何度も思いましたね。「塩さえなめれたら、もう死んでもいい」と思いましたね。

自決用の手りゅう弾をね、６月に逃げるときにもらってたんですけど、「敵と戦うために手りゅう弾がほしい」という兵隊さんにあげたの。本当は動物を殺したりするのに使うためだったみたいだけど、それが良かったの。持ってた人はね、自決（自殺）してましたよ。山で「バァーン」て音がして、見たら小腸が飛び散って、木やらに巻き付いてるんですよ。そんな姿を見たらねぇ…。

でも、終いにはねぇ、「死んだら楽だなぁ」と思いましたねぇ。だけど、なかなか死ねないねぇ。きれいな水が流れとる谷川があって、その水飲み場で、水を飲んだまま死んでる人たちがね、白骨になってね、きれいにほんまに骨になってるとね、「あらぁ、いいねぇ」と思いました。その一方で、「捕虜になるぐらいだったら、死んだ方がましや」て、何回も死に損ないしてますけど、その度に怖くなるんです。「ひと思いにパァと死のう」という気になるけどね、何回も死に損なうと、死ぬのが怖くなるのね。人間て、不思議なもんだなぁ。

【体験談ー終戦ー】

奥村 モト子さん（大津市）

奥村モト子さんはプログ山中で終戦を知りました。

私らは玉音放送が流れてから、１ヶ月も（戦争が終わったことを知らされずに）山の中にいたんです。はじめ、（米軍が）飛行機からビラをまいて、戦争が終わったことを知らせたんです。だけど、私たちは信じませんでしたわ。そしたら、「ビラでは駄目だ」っていうことになって、（日本軍）司令部を通じて、（捜索隊の人が）奥まで入ってきたんです。

あちこち散らばってる人たちに「オーイ！生きてる者はいないか？生き残った者はどこどこ方面へ出てこい」って、歩いて捜しに来てくれました。その時、隊長に「本当に戦争は終わったんだ」といわれて、初めて（戦争が終わったことを）知ったんですよ。

米軍が建てた収容所まで山の中を歩いて行きました。何日かかって行ったのかなぁ。今でもその間のことが、なんぼ考えても空白なの。ただ、山道を杖にすがって行った。一歩、一歩、歩いたら日本に近づけるという感覚はありましたね。でも、怖かったね。「捕虜って、どんなことになるのかなぁ」と、思ったりもしました。

山の中の収容所からトラックに乗せられて、捕虜収容所近くで米軍の人たちに初めて会ったんです。アメリカ兵が「ご苦労さん！」って、日本語で言ったんで、びっくりしました。木の杖をついて歩いている私たちが谷川を渡れずにいると、その人たちが両脇に寄って、手を持ってひょいひょいと、向こう

に渡らしてくれるんですよ。「私たちは（日系）２世といって、両親は日本人です。私はあなたたちのために来ているから、警戒しないで」て、いうんです。

（捕虜収容所では）兵隊さんは、やっぱり蹴飛ばされたりしたみたいだけど、私ら女性は全然そんなことはなかったですね。捕虜収容所の病院なんかは天国でした。そこでも看護婦として働いていました。担架で運ばれて来る（日本人の）患者さんたちの看護をしてました。

アメリカの兵隊さんは「看護婦さんは看護婦さんで苦労したね。ほしいものがあったら、なんでもあげるよ。」て、チーズやらバターやら、色々な物をくれました。もうバターなんかいやほどくれて、仕方ないから余ったバターを髪に付けて、手術室に行ったらね、米軍の軍医さんが「手術室でバターの臭いがするけど、どうしたことや」と言うしね。「私ら、髪の毛がパサパサやし、髪に付けたら良いかと思ったんです。すみません」と、通訳さんを通じて言ったのよ。そしたらね。「かわいそうやねぇ。でも、バターは食塩がいっぱい入っているから、髪にはノー」といって、髪油を持って来てくれましたよ。

奥村モト子さんがプログ山麓を彷徨っていたときに手に入れたかった？？もの

鉄製手榴弾、信楽焼きの手榴弾、軍靴（左足）、米と塩（参考資料）

奥村さんたちの靴や衣服は、すぐにボロボロになりました。そのため、兵士の死体から靴や衣服をはぎとって着用された方もいたようです。

腹ペコで逃げていた彼女たちが一番欲しかったのは、お塩だったそうです。美味しいご飯もお腹いっぱい、食べたかったでしょう。

そうした生活のなか、自殺用の手りゅう弾も・・・。

エピローグ

【体験談

ー伝えたい想い いまを生きるあなたへー】

奥村 モト子さん（大津市）

奥村モト子さんは、捕虜収容所での病院勤務の後、帰国されました。帰国後も、戦後の混乱の中、国内にも蔓延した感染症の患者のための「避病院」や、シベリアからの引揚者を運ぶ病院船での医療活動にも従事されました。

日本赤十字社看護師として、傷つき・病に苦しむ人々への献身的な看護に人生をささげられた奥村モト子さんが『今を生きるあなたへ』伝えたい想いです。

私ら、短い人生の中でいろんなことがありましたわ。戦場のまっただ中での女性の戦争体験て、聞けないですよね。それもあってか、あちこちの学校や地域に呼ばれるんです。そこで、子どもたちに「私が今こうやって話をするのはね、私が１人でしゃべってるのと違って、亡くなったお友達が後ろにいっぱいいてね、私たちは犬死にしたんじゃない。平和のために亡くなったんだよ。ってことを伝えてほしいって、後ろから背中を叩かれてるんだよ。」って言ってるんですよ。「平和のために、ずーっと続けて、戦争のない未来を続けてほしいと願いながら話してんのよ」って。

「命は地球よりも重い」とか、「命が大事や」というけれど、戦争の絶えないのはどうしてでしょうね。戦争は命を一番無駄にしてるんですよ。たくさんの人たちが犠牲になったから、負けて戦争が終わったんだけど、あの人たちが死ななかったら、あのまま戦争終わらんと、どんなことになってたかわからないし。そのことを思ったら、やっぱり「あの人たちのおかげでこの平和が来たんだ」って、痛切に身をもって感じますね。だから、たくさんのお塩を持って、フィリピンへ慰霊に行ってきたんですよ。あの頃、「死ぬんだったら塩をなめたい」と何度も思ったお塩をね。あの人たちのために持って行ったの。

従軍看護婦の奥村モト子さん（出征時、昭和19年4月撮影）

戦争体験談を話される奥村モト子さん

（体験談の聞き取り調査時、平成17年10月7日撮影）

第29回企画展示「戦死者8,843名　フィリピンの戦場Ⅰ－ルソン島編－」展示資料一覧表

展示資料番号	資料名	点数	資料説明	提供者名
第1章　フィリピン　戦死者　1パーセントのプロフィール				
第1節　戦死者が語るフィリピンの戦争経過				
1	草野唱二さんから草野文治郎さんへの最後の手紙	1		草野文子さん
2	目片嘉一さんが使った『九四式軽装甲車説明書』	1	発行年、発行所不明	目片すてさん
3	藤田家の門柱に貼られた門標『遺族の家』	1		藤田はるさん
4	中西恒三さんの遺書	1		中西一雄さん
5	日の丸小旗（中西恒三さん）	1		中西一雄さん
6	小森金之助さんの陸軍戦闘帽	1		小森信行さん
第2節　戦死者の遺品　ありし日を偲ぶモノ				
7	伊藤武一郎さんの国民服（上衣とズボン）	1		植西弘子さん
8	上口仙太郎さんの軍服（軍帽・軍服上衣・袴・赤たすき）	1		上口善美さん
9	水島保さんの指揮刀	1		水島登志さん
10	水島保さんの柳行李	1		水島登志さん
11	中川与一さんの軍服上衣	1		中川あい子さん
12	北野榮一さんの軍隊手帳	1		北野栄子さん
13	太田賢さんのノート（NOTE　BOOK）	1		太田孝之さん
14	太田賢さんの図上の軍事演習メモ	1	手書きの軍事演習図	太田孝之さん
15	市田久治郎さんからご家族への最後の手紙	1		市田勝さん
16	中井三郎兵衛さんの軍隊手帳	1		中井利郎さん
17	北川佐右衛門さんの国民労務手帳	1		北川久雄さん
18	帰国を許された部下（林左三氏）から上村重郎右衛門さんへの手紙	1	昭和19年4月8日	上村重良さん
19	井上外次さんの遺言状	1		井上桂一さん
20	井上外次さんから妻ヤエさんへのハガキ	1		井上桂一さん
21	井上外次さんから息子の桂一さんへのハガキ	2		井上桂一さん
22	増田弘さんの遺書	1	昭和18年12月24日	増田玲子さん
23	田中光男さんが戦地で読んでいた冊子	1	フィリピンの写真集（発行年、発行所不明）	田中太啓男さん
24	吉田喜代次さんから妻越子さんへの手紙	1		吉田越子さん
25	上原四郎さんに送られた千人針	1		上原いよさん
26	福島佐一さんの参考書『索引附ポケット衛生兵必携』	1	昭和15年1月1日5版発行、尚兵館発行	福島治郎さん
27	万木清良さんの戦死公報（証明書）	1	昭和23年4月6日	菅沼文子さん
第2章　フィリピンの戦場では				
第2節　フィリピンでの戦争				
28	長谷井定次さんの寄せ書き日の丸	1		長谷井よねさん
29	軍帽	1	戦死された田中為三郎さんの遺品	田中もとさん
30	ゲートル	1	戦死された田中為三郎さんの遺品	田中もとさん
31	田中為三郎さんからのハガキ	1	戦死された田中為三郎さんの遺品	田中もとさん
32	煙草ケース	1	戦死された田中為三郎さんの遺品	田中もとさん
33	鏡入れ	1	戦死された田中為三郎さんの遺品	田中もとさん
第3節　フィリピンへ送られた滋賀県出身の兵士たち				
34	三好潔さんの小隊名簿	1		三好潔さん
参考資料	臨時召集令状【複製】	1		西邑紘さん
35	竹内正二さんの体内から摘出された砲弾片	1		竹内正二さん
36	御賜の義眼	1		辻井武一さん
37	軍人傷痍記章	1		辻井武一さん
38	『南十字星』（陣中新聞南十字星編集部編）	1	昭和17年6月15日発行、比島派遣軍宣伝班発行	堀池榮一さん
39	通信紙（綴り）	1		清水竹治郎さん
40	『軍人勅諭集　附戦陣訓』	1	昭和17年9月30日発行、武揚堂発行	杉原正雄さん
41	革ベルト	1	青木勘四郎さん使用	青木喜代さん
42	軍靴（右足）	1		渡辺善司さん
43	水筒	1		渡辺善司さん
44	機銃弾の弾頭と薬莢	1		西村良治さん
45	陸軍 鉄帽	1		個人
第3章　無言の帰郷　戦死の知らせ				
46	中部第36部隊長からご家族へ送られた戦死の知らせ	1	昭和17年6月24日	草野文子さん
47	死亡告知書	1	昭和23年11月25日付	長谷井よねさん
48	弔辞	1	昭和18年9月26日、京都師団長　馬場正郎	寺田幸吉さん
49	弔辞	1	昭和18年9月26日、日本赤十字社滋賀支部長　菊池盛登	寺田幸吉さん
50	「昭和十六年公葬ニ関スル書類」	1	旧伴谷村（今の甲賀市内）	松並正博さん
51	「供物役割」	1	昭和18年9月26日の村葬	寺田幸吉さん
52	「故陸軍伍長勲八等　草野唱二君　村葬儀次第」	1		草野文子さん
53	弔辞	1	昭和19年1月28日、小佐治区長　吉治長三郎	北野栄子さん
54	各団体、関係者からの弔辞	8		北野栄子さん
55	御供物料包　陸軍大臣	1		寺田幸吉さん
56	御供物料包　師團長	1		寺田幸吉さん

展示資料番号	資料名	点数	資料説明	提供者名
57	御供物料包　部隊長	1		寺田幸吉さん
58	弔慰料　滋賀縣知事	1		北野栄子さん
59	供華料　甲賀郡自治協会	1		北野栄子さん
60	木札　師團長	1		松並正博さん
61	木札　聯隊長	1		松並正博さん
62	木札　日本赤十字滋賀支部長	1		松並正博さん
63	木札　甲賀郡自治協會長	1		松並正博さん
64	御香料等	20	村葬で北野榮一さんに供えられた香典など	北野栄子さん
65	「大東亜戦争ニ於ケル功ニ依リ金千六百五拾圓ヲ賜フ」	1	昭和17年4月7日	吉坂ちゑさん
66	弔慰金等受領書	1		吉坂ちゑさん
67	皇后宮御歌（箱入り）	1	戦死された北野榮一さんが香淳皇后（昭和天皇の皇后）から下賜された和歌など	北野栄子さん
68	村葬の際に使用した造花、御幣	1	伴谷村の『村葬』に使われた造花（ハス・キク）・御幣	松並正博さん
第4章　従軍看護婦				
69	寄せ書き	1	フィリピンへ出征した奥村モト子さんたち従軍看護婦の寄書	奥村モト子さん
70	比島（フィリピン・ルソン島）従軍記『嘆きのサザンクロス』	1	著奥村モト子、平成26年2月	奥村モト子さん
71	鉄製手榴弾	1		個人
72	信楽焼きの手榴弾	1		青嶌瑞穂さん
73	軍靴（左足）	1		渡辺善司さん
参考資料	米と塩	1		当館

第29回企画展示「戦死者8,843名　フィリピンの戦場Ⅰ－ルソン島編－」 写真・図表パネル一覧表

章	節	項	写真・図表タイトル	提供者	備考
メインタイトル		パナー	砲弾と兵士たち（フィリピンの戦場にて）	堀池榮一さん	
第1章　フィリピン戦死者 1%のプロフィール	第1節　戦死者が語るフィリピンの戦争経過		草野唱二さん	草野文子さん	
			吉坂英太郎さん（演習地にて）	吉坂ちゑさん	
			大村権治良さん（戦死直前に撮影）	大村柾一さん	
			水原五郎作さん	水原千代さん	
			目片嘉一さんが使用した『九四式軽装甲車説明書』	目片すてさん	
			山上青年学校のころの寺田松太郎さん（右端）	寺田幸吉さん	
			北野榮一さん（出征時　佐山産業組合にて）	奥島すみ子さん	
			古澤久三郎さんから妻のいちさんへの手紙	古澤しげさん	
			伊藤武一郎さんの水筒	植西弘子さん	
			増田弘さん（彦根工業学校のころ）	増田玲子さん	
			万木清良さん	万木信一さん	
			上原四郎さん（左側）	上原いよさん	
			正野次郎さん（右）と弟の正野雄三さん	正野光博さん	
			藤田駒治郎さん	藤田はるさん	
			上口仙太郎さんの肖像画	上口善美さん	
			福島佐一さんの『衛生兵必携』	福島治郎さん	
			太田賢さんのノート	太田孝之さん	
			植田潔さん	植田安正さん	
			脇坂寅夫さん	脇坂金五郎さん	
			中西恒三さん	中西一雄さん	
			会社員時代の白井雄一さん（右側）	白井貞夫さん	
			満洲鉄道に勤めていた頃の市田久次郎さん（昭和12年2月）	市田勝さん	
			長谷井定次さんの寄せ書き日の丸	長谷井よねさん	
			植田建次さん	植田美代子さん	
			伊庭信二さんの新聞記事	伊庭長和さん	
			嵐山にて（後列右端の田中為三郎さん・前列左側のもとさん）	田中もとさん	
			吉田喜代次さん	吉田越子さん	
			芳昭さんを抱く永谷時治さん	永谷芳昭さん	
			池田悌治さん	池田シカさん	
			奥島宗男さん（左側）と弟の義治さん（出征時に撮影）	奥島すみ子さん	
			小森庄四郎さんの戦闘帽	小森信行さん	
			中川三郎兵衛さんの軍隊手帳	中井利郎さん	
			水島保さんの柳行李	水島登志さん	
			青木勘四郎さん	青木喜代さん	
			中川与一さんの軍服	中川あい子さん	
			井上外次さん（出征時の家族写真）	井上桂一さん	

章	節	項	写真・図表タイトル	提供者	備考
			満洲義勇軍のころの奥島一重さん	奥島すみ子さん	
			和治清さんの肖像画	和治なつさん	
			田中光男さんが戦地で読んでいた冊子『八月バタン山中及び〇〇岬に激戦地を偲ぶため記念碑を建設す』	田中太啓男さん	
			中澤由吉さんと家族（昭和14年の入営時）	荒川卯太郎さん	
			丸山幸治さんの軍帽	丸山弘さん	
			西澤久三さんの寄せ書き日の丸	西澤敬治郎さん	
			澤地源一さんの村葬で読まれた祭文	澤地洋子さん	
第2章　フィリピンの戦場では	第2節　フィリピンでの戦争		戦闘によって破壊されたフィリピンの街	堀池榮一さん	
			フィリピン　集落を通る日本軍	堀池榮一さん	
			フィリピンでの戦死者数	当館	『大東亜地図大系　フィリピン群島図』（昭和19年3月、博多成象堂発行）を下図にして作成
		バナー	ルソン島での戦争経過図（昭和18年（1943年）以降）	当館	東北大学理学部地理学教室が所蔵する「外邦図画像データ」を下図として利用して、防衛省防衛研修所戦史室の著作『戦史叢書』を参考に作成
	第3節　フィリピンへ送られた滋賀県出身の兵士たち		コレヒドール島の米軍降伏とフィリピンの人々【コレドル陥落記念】	堀池榮一さん	
			出征する高橋助男さん	高橋登栄子さん	昭和13年豊郷駅にて
			兵士の出征を見送る北里村（近江八幡市）の子どもたち	畫田和子さん	
			フィリピンへ向かう輸送船団（昭和16年12月）	田村芳江さん	『大東亜戦争報道寫眞録』（昭和17年12月8日、読売新聞社発行）
			日本軍の輸送船団	田村芳江さん	『比島派遣軍』（昭和18年6月1日、比島派遣軍報道部発行）
			負傷した竹内正二さん	竹内正二さん	
			フィリピンの病院で療養中の竹内正二さん	竹内正二さん	
			竹内正二さんの両手のレントゲン写真（破片摘出後）	竹内正二さん	
			戦場	田村芳江さん	『比島派遣軍』（昭和18年6月1日、比島派遣軍報道部発行）
			リンガエン湾に上陸する日本軍（昭和16年12月22日）	田村芳江さん	『比島派遣軍』（昭和18年6月1日、比島派遣軍報道部発行）
			上陸用の船艇から海に降りる兵士たち（昭和17年）	田村芳江さん	『大東亜戦争報道寫眞録』（昭和17年12月8日、読売新聞社発行）
			戦場の兵士たち	田村芳江さん	『大東亜戦争報道寫眞録』（昭和17年12月8日、読売新聞社発行）
			輸送船上の兵士たち	西村品造さん	
			輸送船の甲板で軍歌を歌う兵士たち	西村品造さん	
			海軍機関兵のころの大塚源弥さん	大塚源弥さん	
			空襲を受けたマニラ湾	田村芳江さん	『比島派遣軍』（昭和18年6月1日、比島派遣軍報道部発行）
			フィリピンの山道を行くトラック	田村芳江さん	『横田隊写真帳』（垣部隊横田隊、昭和18年1月）
			フィリピンの山間部の道路	田村芳江さん	『横田隊写真帳』（垣部隊横田隊、昭和18年1月）
			通信業務（気象観測隊）	田村芳江さん	『比島派遣軍』（昭和18年6月1日、比島派遣軍報道部発行）
			フィリピン　ルソン島の人々	堀池榮一さん	
			ルソン島北部山岳地域の棚田（ポントック地域）	田村芳江さん	『比島派遣軍』（昭和18年6月1日、比島派遣軍報道部発行）
			フィリピンの伝統的な家屋	田村芳江さん	『横田隊写真帳』（垣部隊横田隊、昭和18年1月）
			田植え（フィリピンの農村にて）	田村芳江さん	『比島派遣軍』（昭和18年6月1日、比島派遣軍報道部発行）
			稲刈り（フィリピンの農村にて）	田村芳江さん	『比島派遣軍』（昭和18年6月1日、比島派遣軍報道部発行）
			マラリア　*malaria*	当館	参考文献　厚生労働省検疫所ホームページ 写真出典　CDC（アメリカ疾病予防管理センター）

章	節	項	写真・図表タイトル	提供者	備考
			デング熱 *Dengue Fever*	当館	参考文献　厚生労働省検疫所ホームページ 写真提供　アメリカ合衆国軍
			アメーバ赤痢 *Amebiasis*	当館	参考文献　厚生労働省検疫所ホームページ 写真提供　国立感染症研究所
			水場で飯ごうを洗う兵士	田村芳江さん	『比島派遣軍』(昭和18年6月1日、比島派遣軍報道部発行)
			「出陣学徒壮行会」の様子(昭和18年10月21日撮影)	久保滋さん	『写真週報』第296号(情報局、昭和18年11月3日発行)
			水場で飯ごうを洗う兵士	田村芳江さん	『比島派遣軍』(昭和18年6月1日、比島派遣軍報道部発行)
			水牛に乗るフィリピンの人々	田村芳江さん	
第3章　無言の帰郷　戦死の知らせ		バナー	戦死者を迎えて(公葬)	寺田幸吉さん	フィリピンで戦死した寺田松太郎さんの京都での部隊葬(昭和18年9月17日)
			村葬	畫田和子さん	
			戦死した家族を迎えて(自宅での葬儀)	畫田和子さん	
			村葬　無言の凱旋(戦死者　遺骨箱の帰郷)	畫田和子さん	
			村葬　自宅からの出棺(昭和18年4月)	畫田和子さん	
第4章　従軍看護婦	第1節　従軍看護婦　奥村モト子さんの戦場	バナー	従軍看護婦と傷病兵たち(マニラの病院にて)	木村ますさん	
			フィリピンへ派遣された奥村さんたち従軍看護婦	奥村モト子さん	後列が奥村モト子さん、男性は日赤看護学校の教官、昭和19年4月撮影
			トラックの荷台に乗る従軍看護婦と衛生兵たち(中国の戦場にて)	山崎悦子さん	
			フィリピンの戦場で使われたトラックと乗用車	田村芳江さん	『横田隊写真帳』(垣部隊横田隊、昭和18年1月)
			破傷風 *Tetanus*	当館	参考文献　厚生労働省検疫所ホームページ 写真出典　CDC(アメリカ疾病予防管理センター)
			従軍看護婦の奥村モト子さん(出征時)	奥村モト子さん	昭和19年4月撮影
			戦争体験談を話される奥村モト子さん	当館	体験談の聞き取り調査時、平成17年10月7日撮影